

古代ギリシアにおける 教養・教育の理念に関する研究 (8) — W. イェーガーの『パイデア』に学ぶ —

A Study on the Ideal of Culture in Ancient Greece (8): Learning from Werner Jaeger's *PAIDEIA*

畑 潤

HATA Jun

I. 本研究の課題と構成について

1. 本研究の経緯と小論の対象について

本研究は、ドイツの古代学者である W. イェーガー (1886~1961) の著書『パイデア—ギリシア的人間の人格形成—』(*PAIDEIA DIE FORMUNG DES GRIECHISCHEN MENSCHEN*) の G. ハイエットによる英訳版『パイデア—ギリシア的教養の理念—』(*Paideia: The Ideals of Greek Culture*) から学ぶことを主題とする継続研究の一環で、その継続研究 (6) (都留文科大学研究紀要第85集、2017年3月) に直接連続する。具体的には、『パイデア』第三卷 (第4編) の「1 Greek Medicine as Paideia パイデア—としてのギリシアの医術」の中間部を対象とする。

2. 小論の構成について

小論では、小論としての独自の節 (これまでの「章」名を「節」名に改める) を設定して訳出し、その節ごとに、〈注記と考察〉として私の注記的なものと簡略な考察事項とを付す。〈全体の考察〉は、この「パイデア—としてのギリシアの医術」の章の、後半の訳出のあとに置くこととする。訳文の節の区切りは私の判断によるもので、その節名も私が便宜的に付したものである。なお一つの章内の節番号に連続性をもたせるために、「本継続研究 (6)」の節番号の 1. ~ 4. を 7. ~ 10. に改め、この小論は 11. ~ 13. とする。

「NOTES」(「ANMERKUNGEN」) は、〈原文注記〉として II. の末尾に記す。

3. テキストと論述の仕方

イ) テキストは第三卷 (1944年版) を用いる。本継続研究が複数回にわたるので、英訳版の該当ページを記入することにするが、それは1944年版のものである。なお和訳に際し、ごく一部でドイツ語版を生かした箇所がある。ドイツ語版の参照は、一卷にまとめられた復刻版 (1989年、初版は1973年) を用いている。

ロ) キータームなどは、小論の趣旨に関係してくるので、適宜ドイツ語を挿入し (格変化などは原文中のまま扱った)、その訳を付すようにした。ギリシア語、ラテン語の引用

文に関しては、私の素養の不足からくる誤りを避けるために、また文意は前後によって類推できるので、訳出しないでおいた箇所がある。文章中の参照事項の多くは、訳すことなくそのまま記してある。

ハ) カッコなどの表記は、これまでの継続研究の仕方に準じる。

ニ) <注記と考察>における人名等の確認に参照した文献は、本継続研究 (5) と同様である。

II. 「パイデイヤーとしてのギリシアの医術」(英訳版第4編の1 Greek Medicine as Paideia)

パイデイヤーとしてのギリシアの医術 (その3)

英訳版第Ⅲ巻、1944年版：26p～36p

11. 健康維持 (= 身体の全体の「調和」) の学説とパイデイヤーの思想——古代ギリシア医術を特色づける「目的論」

<訳文>26p～30p

われわれの趣旨にとって、ギリシア医術の全思想を同じ程度に正確に、また詳細に調べる必要はない。そのかなりたくさんのが、われわれの主題とは直接的な関連をもたない、単に医術の研究と実践の細目に関係している。しかし、(前) 5世紀、そして4世紀の医術によって、ギリシア人の典型の形成の (of forming the Greek ideal, der Formung des griechischen Menschen ギリシアの人間の人格形成の) 偉大な精神的過程になされた、もう一つの貢献があり—それは、近年になってはじめて現代医学によって重要だと認められるようになり、それにふさわしく発展させられてきた、ある真理である。それは健康維持の学説 (the doctrine of the preservation of health, die Lehre von der Gesunderhaltung des Menschen 人間の健康維持の学説) のことであり、それは、ヒポクラテースの医術によって教育科学 (= 教育学 educational science, erzieherischen Bereich 教育の領域) に対してなされた、まさに創造的な貢献であった。われわれはそれを、あの時代の医術の著作から現れてくる、万物の自然 (universal Nature, des Gesamtbildes der Nature 自然という全体像) という概念の広い背景においてのみ理解できる。われわれはすでに、ギリシアの医術思想が自然という観念 (the idea of Nature, der Begriff der Nature) によって特色づけられている (dominated, allgegenwärtig 常にいたるところに存在する) ということを指摘してきた。しかし、その具体的な意味は何であったのか? ヒポクラテース学派の研究者たちは、どのようにしてフュシスというものの力 (the power of physis, das Walten dessen, was man Physis nannte 自然と名づけるものの働き) を明らかにしたのだろうか? これまでだれも、早期ギリシアの医術文献における自然という観念、それが、後の時代に対してはもちろん、あの時代の知的歴史の全体に多くの光を投げかけるであろうにもかかわらず、その体系的研究をしようとしてこなかった。あの時代の知的歴史をとおして、すべての本物の医者は、全体を考えるということ抜きに部分を考えるということは決してしない人間として、つまりいつも部分を他のすべてのものに影響し影響されるものと見る人間として、描写されている。われわれはここで、プラトーンの『パイドロス』^{<56>}におけ

るヒポクラテースの描写を思い出してよい。彼が考えていたことは、われわれが自然についての有機体的見地 (the organic view of nature, eine organische Naturauffassung 有機体的な自然理解) と呼んでいるものであった。彼は、医術の方法の例によって、あらゆる主題において、全体に占める部分の機能を把握すること、それによってその部分にふさわしい適切な扱い方を明確にすること、が必要であるということを示そうとした。医術がこの問題への接近方法に対して実例 (the illustration, das Muster 見本) を提供しているということは注目に値する。『パイドーン』^{<57>}においては、プラトーンは、初期の自然哲学者たちを、彼らが宇宙に内在する目的の要素 (the element of immanent purpose in the universe, das Moment der immanenten Zweckmäßigkeit im Kosmos) —自然の有機体的見地と緊密に関係している問題—を考えていないことで、非難している。したがって、彼が自然哲学の中に探して甲斐なかったものを、彼は医学に見出したのである。

もちろん、19世の自然科学 (science, die Naturforschung 自然研究) と医学はギリシア医術をこの見地では見ていなかった。それらの偏見をもった見方 (prejudiced views, dogmatisch Vorurteil 独断的な偏見) は、今度は、もっと新しい医術史の学者たち (students, Philologen 文献学者たち) によってギリシア人を論じるのに使われる前提、の創出を助長した。^{<58>}疑いもなく彼らは、さまざまな自然の事象に対する目的論的 (teleological, teleologische) 研究法は後のギリシア人の医者たち、とりわけガレーノスの仕事 (the work) においてきわめて重要である、ということを知っていた。しかしそこ (=ガレーノスの仕事) は、ひと目見ただけで、哲学の悪影響が医術思想をゆがめてしまっていることを彼らに示すのに十分であった。そしてかれらはヒポクラテースをガレーノスとは正反対のもの、純然たる経験主義者—彼がどのようなものであれ目的論的見解を抱いていることはほとんどありそうにない、と言うに等しい—と見なした。彼 (=ヒポクラテース) は、自然に関する純粹に機械的な因果関係学説 (the doctrine of mechanical causation, kausalmechanischen Betrachtung 因果的機械的考察) の古代の主要な代表者たちの一人であると考えられた。^{<58a>}それにもかかわらず、われわれは調和 (proportion, Maßes 適度・節度) の概念を考えると、このことはまったく間違いであると思わずにはいられない。われわれが見たように、それ (=調和の概念) は、「古来の医術について」の論考を特色づけており (dominates)、またそれは、一般のギリシア人医師たちの実践に深い影響を与えたのであった。同時にそれはわれわれに、これに関連し、目的論のことを語るのに適切な意味を教えている。医者者の義務は、隠れた調和 (the secret proportion, das verborgene Maß) を、それが病気で乱されたときにとり戻すことである。健康のとき、自然は自らあの調和を生み出す^{<59>}、もしくは、自然そのものは申し分のない調和 (the right proportion, das richtige Maß 真の調和) である (is)。⁽¹⁾その調和 (proportion, „Maßes“) や釣り合い (symmetry, „Symmetrie“) という概念と、あの混合という概念 (that of mixture, der so wichtige Begriff der „Mischung“ 混合という非常に重要な概念) は、密接に結びついているが、それ (=混合という概念) は実に有機体を支配する多様な諸力の中のふさわしいバランス (equal balance, gerechtes Gleichgewicht) と言ってよいものを意味しているのである。⁽²⁾^{<60>}自然はあの賢明な標準 (standard, Norm) に達しようと奮闘する (つまりそういうふうにならなければならぬ) ; そしてその見地からすれば、いったいどうしてプラトーンは力、健康、そして美を身体の '徳' (virtues,

Tugenden)' (ἀρεταί) とみなすことができ、またそれらのことを魂の倫理的な徳に対応すると話すことができるのか、を理解することは容易い。彼がアレテー (arete) ということで意味しているのは、医術の観念によれば、正常な健康が存する、諸部分あるいは諸力のあの釣り合い (symmetry, Symmetrie) のことである。⁶¹われわれはそれゆえに、早期の医術の著作のなかでアレテーということばに出くわしても驚かされる必要はない。⁶²それは、プラトーンの影響で初めて (医術に: in die Medizin) 導入されたのではなかった。(むしろ: Vielmehr) あの自然の観方は、全体として古代ギリシア医術の特色をよく表しているのである: その (=自然の) 習わしの基礎となっている目的性 (purposefulness, die Zweckmäßigkeit 合目的性) は、とくに、病気 (の状態: Zustand) において明瞭に現れる。医者は病人を自然 (nature, die Natur) に抵触することによって治療したりはしない。病気の症状—とくに熱—は、実に正常な状態がとり戻されていく過程の始まりである。その過程は身体自身によって始められ、そして医者がしなければならないことは、自然治癒への本能的な衝動 (the natural urge to self-healing, dem natürlichen Vorgang, der zur Heilung strebt) を助けるために自分が介入することのできる瞬間を注意して待つことだけである。つまり (then, denn) 自然は、自らを (自分で: selbst) 助けるだろう。⁶³このことは、病気についてのヒポクラテース学説の第一の原理 (axiom, Prinzip) である; 同時にそれは、その目的論的な根本原理 (basis, Grundanschauung 根本思想) のもっとも的確な表明である。

二世代後に、アリストテレスは、技術 (art, die Kunst) は自然を模倣しその欠如 (defects 欠如・欠陥, die Lücken 欠落個所) を補うために考案された、とすることによって技術と自然との関係を定義した。⁶⁴この見解は、当然に自然はすべてに染み渡る (all-pervading, durchgehend 一貫した) 目的をもっていると思っており、またそれ (=この見解) は、自然のなかに技術の模範 (prototype, das Urbild 原像) を見るのである。しかしソフィストたちの時代において、何人かの医師たちは、(逆に: umgekehrt) 身体の個々の部分と技術上の道具および発明品とを比較し、その間の類似性をはっきり指摘することによって、人間の有機体は目的によって支配されているということを証明してきていた。この種の目的論のよい一例がアポローニアのディオゲネース⁴にある。この人物は自然哲学者であるのと同時に医者でもあった、そしてそれ故にその理論の創始者であると推論されてきた。⁶⁵確かにそれは、医者仲間の間で始まった。ヒポクラテース学派のなかでは、われわれはそれを小論 *On the heart* (「心臓について」) のなかに見出す。⁶⁶論文 *On diet* (「食餌法について」) 第1巻は、異なった、より神秘的な種類の目的論を含んでおり、それによれば、すべての技術は、人間の自然 (man's nature, der Natur des Menschen) の模倣であり、その秘密の (arcane, verborgenen) 類推によって解釈され得る—そして著者はいくつものこじつけの例を証拠として付け加えている。⁶⁷これはアリストテレスともディオゲネースとも共通しているところはないが、しかし少なくともそれは、その考え (=目的論) が当時の医術思想にいかんにか広がっていたかを、またそれ (=目的論) がいかに多くの形をとったかを、示している。‘医者の技術は苦痛を惹起するものを無効にすることができ、人びとを、その苦しみの原因を取り除くことによって健康にすることができる。自然はそのことを助力なしにすることができる。もし人が座ることで苦しんでいるならば、人は立ち上がるべきである; もし人が動き回ること (moving about, der Bewegung

動くこと)で苦しんでいるならば、人は休養すべきである：このこと、さらにその他の多くの医者(の)の技術が、すでに自然のなかに存在している。’⁽⁷⁾ <68> これらは著者の個人的な思索ではある。しかしヒポクラテース学派も、医者(の)の義務は単に自然に仕え、それを補うことである、と考えている。そのように、*Visits* (「異国の諸都市への訪問」=「流行病」)⁽⁸⁾に記されている：‘患者(の)の自然 (nature, die Natur) は、彼の病気を治す医者(の)である。’<68a> このことは、個体(の)の自然 (the individual physis, die individuelle Physis) は念頭(に)に目的をもって働く存在(だ)ということ(を)意味している；しかし次(の)ような文章 (sentence, Satz) (もっと正確に言えば箴言) では普遍的な自然 (the universal physis, die allgemeine Physis) が話(さ)れている。自然 (nature, die Natur) は自らの道と方法(を)、意識(的)な思考力 (intelligence, Intelligenz) 無し(で)見出す(一)たとえば、目の瞬きや舌(の)動き、そして同様(の)現象(に)おいて。⁽⁹⁾ 後(の)自然哲学者(たち)は、(われわれが指摘(し)てきたように、医学思想(に)影響(さ)れて) 自然(に)おける目的 (the purpose, der Zweckmäßigkeit 合目的性) の問題(を)、全世界(に)内在(す)る神(の)理性(が)あらゆるもの(を)意味(深)い仕方(で) (in a purposeful way, so sinnvoll たいへん賢明(に)) 秩序(だ)ててきた(の)だと仮定(す)ること(によ)って、解決(し)た。<69> ヒポクラテース学派(の)人(び)とはあらゆるそれ(に)類(す)る形而上学(的)な仮定(を)避(け)た；しかしそれ(で)も彼(ら)は、自然(が)無意識(の)目的(を)もって振(る)舞(う)こと(を)称賛(し)た(の)である。現代(の)生気論 (vitalism, Vitalismus)⁽¹⁰⁾ という理論(は)意識(と)無意識(と)の間(の)溝(を)、生理学(的)概念(を)用(い)、有機体(に)おける合目的(な)過程(は)刺激(に)対(す)る反(応)である(と)断言(す)ること(によ)って、埋(め)る。ヒポクラテース(は)そのよう(な)考え(を)もた(な)い。古代(の)科学(は)、どのよう(に)してそのよう(な) (= 合目的(な)) 経過 (processes, Vorgänge 事象) が始(ま)るか(に)ついて決(して)完全(に)は結論(を)下(す)こと(は)しな(か)ったが、しかしそう(し)たこと (= そのよう(な)経過) が現(に)起(き)てい(る)こと(は)まったく確(か)であ(っ)た。それ (= 古代(の)科学) は、自然(に)おけるあ(の)目的 (purpose, die Zweckmäßigkeit 合目的性) はいつ(も)生き(き)とし(た)生命 (life, die Existenz) と関係(し)てい(る)と考え(た)のであり、そして生き(き)とし(た)生命(が)医学(の)唯一(の)目的(な)のであ(る)。

上述(し)たよう(な) *Visits* (「異国の諸都市への訪問」=「流行病」) の一節(に)おいて、その著者(は) (この関連(に)おいて：in diesem Zusammenhang)、自然(を)必要(な)こと(を)為(す)よう(に)誘導(す)、無意識(の)パイデイア (an unconscious paideia, einer unbewußten Paideia) という考え(を)取り入(れ)てい(る)：εὐπαιδευτος (よい教育(を)受(け)た) ἡ φύσις εχούσα οὐ μαθοῦσα, τὰ δέοντα ποιῶ. ヒポクラテース(の)リトレ版 (Littre’s edition) (価値(ある)仕事(である)、その時代(を)考(え)るならば、しかし、そのテキスト(は)その集成(の)大部分(に)最高(に)応(じ)てい(る)とはい(え)、テキスト批評(の)見地(か)らみ(て)不(十)分(である)では、この意見(は)逆(に)さ(れ)てお(り)、こう記(さ)れてい(る)：‘自然(は) (たしか(に)：zwar) 無教育(で) (uneducated, ungebildet (ἀπαιδευτος)) 何も学(ん)できてい(ない) (のであ(る)が)、しかしそれ(に)もか(か)わらず適切(な)こと (correct, das Richtige) をする。’⁽¹¹⁾ 同じ種類(の)否定的(な)考え(は)、後(の)、箴言(に)富(む)小論文 *On food* (‘Über die Nahrung’) (「栄養(に)ついて」) を著(わ)した著述家(に)見出(さ)れる：‘あらゆるもの(の)本性(は) (the natures, die Naturen) 先生 (teacher, Lehrer) をも(っ)てい(な)か(っ)た。’<70> それ(は)ほとん(ど)、彼(が) *Visits* の問題(の)個所(の)異文(を)読(ん)でい(て)、それ(を)模造(し)てい(た) (was imitating, nachgebildet) か(の)よう(に)見(え)る。もし彼(が)そう(し)てい(た)のなら、彼(は)ま(ん)ま(と)間違(っ)た推論 (the wrong track, die falsche Fährte) に(は)ま(っ)た(の)のであ(っ)て、という(の)は、何

であれパイデИАー (paideia, Paideia) なしに正しく (correctly, das Richtige いちばんいいこと) なされ得る、と言うのは、彼の同時代の人びとは、ばかげた逆説だと考えたであろう。それゆえ、自然は教わってはいないのに (without having learnt how, ohne es gelernt zu haben) 自発的に (herself, aus sich selbst 自発的に) 適切なこと (what is right, das Notwendige 必要不可欠なこと) をするのであるから、自然は独学 (self-education, der Selbstbildung) の天賦の才 (εὐπαιδευτος よい教育を受けた) をもっているのに違いない。自然は自分の見事な腕前を、それを自ら関わっている仕事で直接に使うことによって、発達させる (develops, entwickelt)。⁽¹²⁾ あ、最高の写本 (manuscript, Handschriften 手写本) に出ている読み方 (reading, Text テキスト) が⁽¹³⁾、エピカルモスの作とされる箴言集の編纂者によって (も : auch) 使われた⁽¹⁴⁾ ; というわけは正確に同じやり方で、彼 (=エピカルモス) は自然の知恵 (the wisdom, die Weisheit) を、自然は自ら教育した (she educated herself, sie sich selbst erzogen hat 自然は自ら己を教育した) ということを示唆することによって、説明しているのである。自然の無意識の推理力 (reasoning, Vernunft 思考力) は、人間の意識的な‘教養 (culture, Bildung)’ に類似するものと考えられている。〈71〉その考えは、時折医術の著作に表れるソフィストたちの考え—パイデИАー (paideia) による人間性 (human nature) の形成は農業や動物の飼い慣らしに対応する、というもの〈72〉—よりもより意味深い。というのは、そんなふうと考えられているパイデИАーは、外部から課せられる訓練 (training) やしつけ (discipline) にすぎないからである ; ところがヒポクラテースの見地によれば、それは、自然自身の目的的な活動における (in the purposive action of nature herself, in der Natur selbst und ihrer Zwecktätigkeit 自然自身とその目的的活動において)、無意識の (unconscious, unbewußte)、自発的な (spontaneous, spontane 自発的な・内発的な) 予備的段階をもっている。⁽¹⁵⁾ その見解は自然 (nature, das Natürliche) をより理性的にし (rational, vergeistigt 精神的にする・知的なものにする)、理性 (reason, das Geistige 精神的なこと・知的なこと) をより自然なものにする (natural, vernatürlich)。身体的な事象を説明するための精神的な類比というすばらしい使用は、その逆も同様であるが、同じ種類の知的な態度のおかげである。この方法によって *Visits* の著者は、‘身体の激しい活動 (exertion, Anstrengung 労苦) は手足や肉体に、眠りは内臓に、滋養物をあたえる (nourishes, Nahrung 食物・栄養)’ や、‘思考 (thought, das Denken) は魂の戸外への散歩である (walk abroad, der Spaziergang 散歩)’ のような生き生きとした文章を考え出している。⁽¹⁶⁾ 〈73〉

<注記と考察>

- (1) イェーガーは原文注記59で、参照すべきものとして「古来の医術について」や「食餌法について」などを指摘している。そのなかの「食餌法」第3巻69は、下記のとおりである (近藤均訳、『ヒポクラテス全集 第2巻』所収)。

「以上は、行きあたりばったりの生活を送らざるを得ず、何はさておき健康に気をつけるということはない多くの人々に私が忠告することである。これに対し、以上のことをすでに心がけ、健康なしには富をはじめいかなるものも価値がないということを承知している人々のためには、私は、可能なかぎりでの最高度の精密さに達した摂生法 (diata, a regimen) を見出してきた。その摂生法は話しを進

めていくにつれて明らかにしていくことにする。この発見は発見者の私にとってすばらしいものであるとともに、それを学ぶ者にとっても有益なものである。私の先輩たちは誰も決してわかろうとしなかったが、私は、このことこそ他のいっさいのことに比べてはるかに価値があると断言する。それは病気にかかる前に予後と、体がどんな症状を呈しているかの診断、つまり、食物が運動より過剰なのか運動が食物より過剰なのか、それとも両者が互いにほどよくつり合っているか、ということから成っている。実際、病気はどちらか一方の過剰が原因でおこる。両者が互いにつり合っていれば健康が保たれる。私はそれらの外観について説明する。そして、人が健康にみえ、快食し、運動することができ、体も皮膚も良好である場合にはどんな外観を呈しているかを説明しよう。」

挿入したギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。ヒポクラテース全集では、*diata* (ディアイタ：生活様式、暮らし方、食生活、飲食物、生活の場所、などの意味がある) は *diet, regimen* と訳されている。訳者の近藤も概説で、「[食餌法]と訳したのは *diata*、つまりいわゆるダイエットであるが、この語は必ずしも狭義の食餌療法を表わしているのではなく、むしろ「摂生法」とか「生活法」とでも訳したほうがいっそう適切な場合も少なくない。」と説明している。

イエーガーが指摘しているヒポクラテース全集の諸論稿では、身体が健康を回復していくための個々の症例にふさわしい食餌法が、その考え方とともに縷々述べられている。

- (2) イェーガーは、「調和」(=身体健康)という思想と古代医術(ここでは、原文注記⁶⁰の<注記と考察>(10)に見るように、「調和」に類する多くの言葉が用いられている)との本質的關係を史実のなかに確認し、その「調和」の思想が、魂の倫理的なアレテー(*ἀρετή*：すぐれていること、美点、完全性、美德、幸福)の探求の基礎になっていくことを観察している。つまりイエーガーは、古代医術史のなかに「調和」の思想史にとって重要な局面があったことを発見し、説得力のある証明を展開しているのである。

ところで古代ギリシア医術で確認されていた「有機体を支配する多様な諸力の間のふさわしいバランス」という考え方は、人間の身体や精神のことに止まらず、広く「環境」や(経済活動を含む)「社会」を理解していくうえでも、いよいよ重要性を増している。むしろ、探究とは、自由の精神を前提に、自然や社会の「隠れた調和」(=気づいていなかった本質と事象の諸関連)を見出ししていくことだと言ってよい。論理必然的に実践とは、存在する本質的關係を断ち切る何らかの(社会と自己内部に在る)人為的・作爲的な力に対し抵抗し、「調和」(=理想・アイデア、つまり真の見通しの根拠となるもの)に接近していこうとすることである。

- (3) 該当箇所は、ドイツ語版では、「アリストテレスは、2世代後に、技術と自然の關係を、自然が技術を模倣するのではなく、技術が自然の欠落箇所(*die Lücken*)を埋めるために考案される、というように結論した。」となっている。

《原文注記》64. のは未確認であるが、『断片集』の「対話篇(哲学の勧め)」に、次のような叙述がある。

「しかしながら、自然に即して生じて来るものは、何かのために生じて来るのであり、そして常に、技術によって生じて来るものよりは、よりよい目的のために

組成されるのである。何故なら、自然が技術を模倣するのではなく、逆に、技術が自然を模倣するのであり、そして、技術は自然を補助し、自然がやり残したことを、完成するためにあるのだからである。」(『アリストテレス全集17』岩波書店、1972年、所収)

(4) (アッポロニアの) デイオゲネース：前499年頃～前428年頃。折衷主義の自然哲学者で、「呼吸や生殖、血管などに関する論究を残したことで知られている。」という。(松原著) 本継続研究 (5) のⅡ. 2. <注記と考察> (21)、本継続研究 (6) のⅡ. <原文注記>の<注記と考察> (2) を参照のこと。

(5) イェーガーは<原文注記>66. で、「心臓について」の全体が目的論的思考法によって書かれていると指摘している。そのことを前提に、参考のために下に一か所だけ引いておく (『ヒポクラテス全集第2巻』)。

「血管の出発点の近くに、内腔にとり囲まれた部分がある。これは柔らかく多孔性で、「耳」と呼ばれるが、耳と違って穴はない。事実、それは叫び声を聞きとることはない。それは、自然が空気を引き寄せるための器官である。確かに、それは巧みな職人による器官であると私は思う。その職人は、心臓内部がそこに圧縮してつまっているもののためにつくりが堅く、そのため吸引の働きが決して強くはないということを考慮に入れて、鍛冶師が炉で用いるようなふいごをその作品にとりつけた。それによって吸気を獲得するためである。このような理論の根拠としてあげられるのは、心臓が一体となって運動するのに対し、耳はそれとは独立して膨張したり、収縮したりするのが見られることである。」(訳者は注記で、「耳」とは「心耳」と考えられ、「(吸引の働きが) 決して強くはない」は「きわめて強い」という解釈がある、と説明している。)

(6) イェーガーは<原文注記>67. で、「食餌法について」第1巻の11を指示している (ドイツ語版では11～24を指示している)。その11の最初の部分は下記のとおりである (『ヒポクラテス全集第2巻』)。

「人間は、眼に見えるものから見えないものを探究することができない。実際、人間が行使する術は人間の自然性に似ているにもかかわらず、人間にはそのことがわからない。神々の精神は、人間たちに、神々自身の能力を模倣するよう教えた。しかし人間たちは、自分が何を行なっているのかは知っているけれども、何を模倣しているのかを知らない。実際、あらゆるものは、似ているとはいってもやはり似ておらず、あらゆるものは、調和しているといってもやはり不調和である。…」

(7) <原文注記>68. で指摘されている箇所は、『ヒポクラテス全集第2巻』では次のように訳されている。

「靴直し職人は全体を部分ごとに分け、部分を全体にまとめあげる。彼らは切ったり縫ったりして、ぼろぼろになった部分を修繕する。人間も同じことをこうむる。全体は部分に分けられ、部分は結びつけられて全体となる。ぼろぼろになった部位は医者が切ったり縫ったりすると元に戻る。以下のことも医術の役割である。すなわち、痛む部位を取り除き、苦痛の原因をなくして健康を回復させることである。自然はおのずからその方法を承知している。座っていると立つことが苦痛となる。動いていると休息するのが苦痛となる。その他の点でも自然は医術

と同じである。]

この訳の「座っていると立つことが苦痛となる。動いていると休息するのが苦痛となる。」は、ローブクラシカルライブラリーでは、καθήμενος πονεῖ ἀν ἀστήνα, κινεόμενος πονεῖ ἀναπαύσασθαι, When a man is sitting it is a labour to rise ; when he is moving it is a labour to come to rest. となっている。

- (8) 書名の *Visits* については、本継続研究 (6) のⅡ. 2. <注記と考察> (1) を参照のこと。

- (9) ここで引かれている一文は、「流行病」 (= 「異国の諸都市への訪問」) 6.5.1の「病気は自然が癒してくれる。」(『ヒポクラテス全集第1巻』の訳; ローブクラシカルライブラリーでは、Νούσων φύσιες ἰητροί. The body's nature is the physician in disease.) (原文注記68aの<注記と考察> (18)) に継続する部分で、下記のとおりである。

「自然は、癒すてだてを自力で見つけることができる。しかもそれは、熟慮してのことではなく、ほんの一瞬のできごとであり、舌をはじめ、そのようなすべての器官が本分を果たす。自然は、何も教わったり学んだりせずに、必要な処置をほどこすことができる。涙、鼻水、くしゃみ、耳垢、唾液、痰、呼気、吸気、あくび、咳、しゃっくり。…」(『ヒポクラテス全集第1巻』での訳)

- (10) 生氣論：「生物体を構成する要素はすべて、ある種の生命力に支配されており、その生命力の発現こそ無機的世界と生命現象とを区別するものである」とする主張。(『哲学事典』平凡社、1971年)

- (11) ギリシア語で引かれている部分は前記 (9) の一部分であり、その箇所は、ローブクラカライブラリーの文章に一致する。その部分の英訳は次のとおりである。

Well trained, readily and without instruction, nature does what is needed.

(よい教育を受けていて、進んで、教え無しに、自然は必要なことを為す。)

改めてということになるが、大槻真一郎を代表とする翻訳『ヒポクラテス全集』(全3巻)では、リトレ版(1839-61)が底本とされている。小川政恭訳『ヒポクラテス 古い医術について 他八編』(岩波文庫、1963年)では、ローブクラシカルライブラリーのもの(1923年)が底本にされている。イエーガーはリトレ版について、その価値を述べつつも「テキスト批評の見地からみて不十分である」とコメントしている。大槻は、ヒポクラテス全集の編集史の非常に複雑な経緯について詳細に説明し、そのなかで「ロウブ版」のヒポクラテス全集を担当したケンブリッジのジョーンズのことに触れ、彼が、「テキストの歴史がそれほど重要で面白いものとは考えもしなかったことを述懐」していると指摘し、また彼がロウブ版で翻訳したときにも「ヒポクラテスのテキスト校訂のほんとうの価値について、いくらか疑いを抱いていたことを告白している」、と指摘している(『ヒポクラテス全集第1巻』の「序」)。イエーガーは、ここで問題にしている一節に関して、εὐπαιδευτος(よい教育を受けた)が ἀπαιδευτος(無教育の)と、正反対になっていると論述している。

- (12) イェーガーは、「彼ら(ヒポクラテス学派の人びと)は、自然が無意識の目的をもって振る舞うことを称賛したのである」と述べているように、ヒポクラテス学派の医術思想の核心に該当することとして、その自然の無意識の目的性への着眼

を見ている。その見地から、*Visits* の一節のテキスト批評として、ἀπαιδευτος (無教育の) ではなく、εὐπαιδευτος (よい教育を受けた) の方が選ばれるべきだとし、またその見地は、論理的に、「自然は独学の天賦の才 (εὐπαιδευτος) をもっているのに違いない」という趣旨をもっていることになる、と述べている。

- (13) ここで言われている「最高の写本」とは、ディオゲネス・ラーエルティオスのいわゆる『ギリシア哲学者列伝』のことであろう。《原文注記》の〈注記と考察〉(21)を参照のこと。なおイエーガーの続く叙述に直接該当する箇所は、加来彰俊訳(岩波文庫、上、1984年)では、「牝鶏はひとりでにそれを教わっているのだから。」と訳されている。《原文注記》の〈注記と考察〉(21)に照応する。
- (14) エピカルモス：前560/530年頃～前460/440年頃。コース島生まれのギリシア最古の喜劇詩人で、「ドーリス方言で52篇にのぼる喜劇を書いた」とされ、また「ピュエタゴラス派の哲学者兼医師」としても知られているという。(松原著)ここで言われている、「エピカルモスの作とされている箴言集の編纂者によって(も：auch)使われた」とは、H. ディールス、W. クランツ編の『ソクラテス以前哲学者断片集』(邦訳名、岩波書店、全5冊、1996年～1998年)のことであろう。《原文注記》の〈注記と考察〉(21)を参照のこと。
- (15) イェーガーは、ヒッポクラテース学派における医術思想のパイディアは、「外部から課せられる訓練 (training) やしつけ (discipline) にすぎない」ものとは異なり、「自然自身の目的的な活動における、無意識の、自発的な予備的段階をもっている」と説明している。これは実に重要な説明である。ヒッポクラテース学派が医学実践とその探究をとおり、自分たちの医学思想の原理として見出していった自然についての有機体的 (あるいは目的論的) 見地 (つまり自然は固有の調和の原理をもち、それに向けて自ら総合的に作用していくという見地) とは、自然自体が、「飼い慣らし」あるいは「外部から課せられる訓練やしつけ」とは原理的に異なる、「自発的」な働きを本源にもつ (=「独学の天賦の才」をもつ) という洞察のことなのである。そしてイェーガーは、プラトーン (たち) は、時代との格闘のなかでさまざまな思想的遺産を吟味・批判しつつ、とりわけこの医学思想との照応を重視して、人間探究を掘り下げていったと説明している。
- なお、イェーガーのこの叙述は、大田堯が近著で繰り返す述べる、「…教育はその天賦の学習力、生命の根源的自発性を補助する技 (アート) である。」(『私の憲法と学習権』、『私にとっての憲法』岩波書店、2017年4月、所収) という考え方に似る。大田はまた、その自撰集成の中の「総序——未来に託して」(藤原書店、第1巻、「総序——未来に託して」2013年) のなかで、「…いうまでもなく、この社会の根本機能としての教育は、あくまで個体生命一つひとつ、一人ひとりの「根源的自発性」を前提に、その子、その人の生命とひびき合うことが必要でしょう。そのユニークな個体自身の自らなる選択を第一義とすべきでしょう。」と述べ、続けて「啐啄同時」という言葉を紹介している。偶然のことであるが、イェーガーも《原文注記》71. で、エピカルモスの断片とされているもの (イェーガーは「偽作」だとする) が「雌鶏がその卵を孵化する仕方のことを話している」と指摘している。
- (16) 原文注記の〈注記と考察〉(25)を参照のこと。

12. 目的論を基礎にする健康を維持する思想——一般人に向けて書かれた初期の論文「健康時の摂生法について」の特徴

<訳文>30p~33p

われわれが、自然は目的的に働く、無意識で自発的な力であるという観方をよく考えるならば、われわれは、小論 *On food* (「栄養について」) における寸言をより容易く理解できる: ‘自然は誰にとっても、すべてのことにおいて、十分である (enough, genügt).’⁽¹⁾ <74> しかし、まさに医者はその技術で、自然の、その平衡が崩れたときの元気を回復させる働きを助長するのであれば、当然彼の職務は、差し迫った乱れを防ぎ、正常な状態の維持を見守り続けることであるということにもなる。古典期においては、2、30年前までのどの時期よりも、医者は病人よりも健康な人びとにより関わっていた。健康を扱う医術の分野は *hygiene* (τὰ ὑγιεινά ヒュギエイナ)⁽²⁾ という一般的名称で通っていたのであり、その主な関心事は ‘diet, Diät (食餌療法、ダイエット、養生法)’ であった—それは、ギリシア人にとっては、病人食の調整のみならず、人間の生活習慣の全体 (whole routine of living, die gesamte Lebensweise 生活の仕方の全体)、とりわけ食物とその人に求められる活動を決定する規準 (the rules, die Regelung 調整)、を意味していた。この故に、人間の有機体の目的論の概念に基づいて仕事をする医者にとって、重要な教育的責務を引き受けるということは必然的であった。健康の面倒をみること (the care of health, Gesundheitspflege) は古代においてはほとんどまったく私的なことがらであった。主としてそのことは、当人の実際的な理解力や当人の要求、それに当人の資力はもちろん、問題についての個々の教養水準 (the cultural level, dem Bildungsniveau) にも依っていた。それ (= 健康の面倒をみること) はもちろんいつも、平均的な人間の一日の重要な部分を占める、体育 (gymnastics, der Gymnastik) と結びついていた。体育活動自体は、衛生による経験の長年の産物であり、身体とその働きの安定した管理を必要とした。体育トレーナー (the gymnastic trainer, der Gymnast (古代ギリシアの) 体育教師) は、その指導を受ける者たち⁽³⁾ に自分たちの身体の世話の仕方を助言する専門家として、医者に先行した (preceded, der Vorgänger 前任者)。そして彼は、新しい ‘diet (食餌法・摂生法)’ の理論が精巧に作り上げられたとき、取って代わられることはなかったのである—彼はいつも自分の地位を医者と並んで維持したのである。医術は体育の領域へ侵害しようと試みることによって出発したけれども、残存してきた栄養学の著作は、二つの領域はまったくすみやかに境界が定められたこと、また医者はあるていどのことがらでトレーナーの権威を最終的なものと認めたということ、を示している。

われわれは、ギリシア文化 (culture, Kultur) のさまざまな時代の、毎日の生活に対する適切なダイエット (養生法・摂生法) を論じる、かつては夥しくあった医術文献のいくらかの残存物をもっている; そしてその発展を再構成することによって、われわれは、さまざまな時代のギリシア人の社会生活で起きた変化になにほどかの価値ある光を投げかけることができる。しかしここでは、われわれはただその始まりだけに関心を寄せる。健康法 (hygiene, Hygiene) に関するもっとも早い時期の文献は失われている。ギリシア人の体育 (physical culture, Körperbildung からだ作り・体育) が初めて発展した、5世紀の終わりから4世紀の始まりにかけての時期に関しては、われわれは *On regimen in health*

(「健康時の摂生法について」, Über die gesunde Lebensweise (「健康な生活の仕方について」)) と呼ばれている短い論文をもっている。そして、もしわれわれがふだん使われている (usual, herrschende 支配的な) 年代学を認めることができるとするならば、われわれは証拠のもう2点をもつことになるだろう: *On diet* (「食餌法について」) とよばれる四巻本の著作であり、古代 (末期: späteren) において非常に有名なもの; それから、傑出した医師であるカリュストスのディオクレースによる失われた著作の多数の断片で、後の著述家たちによって保存されたもの、である。しかしながら (われわれが明らかにするように)、これらの双方とも、通常みなされてきているよりは後に年代が定められなければならない。⁽⁴⁾ なるほど、それら (= 上述の作品群) がある典型的な (typical) 特徴を示しているように見えるので、それらを一緒にたった一つの時代 (a single epoch, einer einheitlichen Epoche) の典型 (representative, die Vertreter) として研究することが可能となる。しかし、その主題 (the subject, des Gegenstandes) を扱うそれらの方法における違いは、それらが書かれたとき、それ (= その主題) は相当に高度に発展されたということ、またそれらの著者たちは、際立った個性 (pronounced individual character, geistiger Individualität 知的な個性) の持主であったということ、を示している。それ故に、それらは別個に (separately, nacheinander 次々と) 書かれたのに違いない。その上、あの時代の食事療法学 (the science of diet, der Diätetik) の完全な歴史というものは、ヒポクラテース全集における他の諸著作のあっちこちにちりばめられている健康な人間の養生法 (the regime, die Lebensweise 生活の仕方) に関する規則 (rules, Regeln) を考慮に入れなければならない。

論文 *On regimen in health* (「健康時の摂生法について」)^{<75>} は、素人 (layman, Laien) が自分たちの日々の 'diet 摂生法' の適切な方法を選ぶのを案内するために書かれた。別の小冊子 *On affection* (「疾患について」) もそうであり、これはそれゆえ、古典時代においてさえ、しばしば写本としてそれに並べて置かれた。後者は、素人を教育することの困難さを論議してから、さらに彼らが、自分たち自身に気をつけ自分たちの病気が悪化することを防ぐために; あるいは、もしそのことが不可能であるならば、医者の治療をより理解し、そのこと (= 医者の治療) で彼を支持するために、どれだけの医学的知識を必要とするかを問うてから、始めている。そしてそれは、並みの読者によって理解されるために書かれた、病人に対する食餌療法の叙述で終わる。⁽⁵⁾ それは、それゆえに構造において著作「健康時の摂生法について」とぴったり一致している——そのことが、なぜ古代ギリシア人がそれら双方を同一の著者に帰したのかを教えている。それ (= 「健康時の摂生法について」) が健康な人間の食養生 (regime) に対し与える調整 (the regulations, die Regelung) は、さまざまな季節、地域、体質 (constitutions)、年齢、そして性別にふさわしい食べものや運動 (exercise, körperliche Anstrengungen 肉体的な骨折りに) に及んでいる; しかしそれは、それにもかかわらず、すべて非常に一般的な言い方である。その著者の中心的な考えは、一種の医学的な力の均衡を維持することである: 彼は寒い季節には、温かさや乾燥を増加することによって冬の影響を相殺する (compensate, kompensieren) ために多くの固形食とわずかな流動食を、暑い天候のときには水分や涼しさを増加することによって夏の影響を相殺するために反対を、処方する。このように彼はいつも、身体を圧倒しようなどのような性質もその反対を強調しようとしている。⁽⁶⁾ というのは、彼は (著作 *On*

the nature of man (「人間の自然性について」⁽⁷⁾)の著者と同じように)、病気は、われわれの身体が一つの要素ではなく複数の要素によってできていて、それらの適切な調和は、それらの四つの要素―熱、冷、湿、乾―のいずれかが過度に増加することによって簡単に壊れるという事実に起因する、ということを感じている。その理論は、著作「古来の医術について」の著者によって、余りにも図式的過ぎるとして、適切にも拒否されているが、しかし、そのまさに図式性こそがそれを使いやすくしているということを理解するのはむづかしくない。それは食餌療法を、身体に適用される一種の単純な外交術 (*diplomacy*, *Diplomatie* 外交術・かけひき) にする：つまり、扱うことのできるほんの少数の異なる要素をもつ技術である。それはまだ、約百年後にディオクレースの著作のなかでそうなったほどには、高度に発達してはいなかった。ディオクレースは実際に、朝から夜までの一日の全経過を調整した (*regulated*, *regelt*)、しかるにこの初期の著作 (の著者：*der Verfasser*) は、夏と冬という両極端、それに春と秋という二つの季節の変わり目、にふさわしい食餌療法の変化の単にいくつかの描写をする (*description*, *kennzeichnet* 特徴を述べる) だけである。彼 (=「健康時の摂生法について」の著者) のやり方による (*by his rules*, *nach seiner Vorschrift* 彼の指示による) 生活の主要な困難さは、それらが詳細過ぎるということではなく、それらが一般的過ぎる、ということである。医者とトレーナーとの関係がまだ固定されていなかったため、その著作の著者は、トレーナーに助言を求めることなく、運動 (*exercise*, *Leibesübungen* 身体運動・体育) は季節に準じて増加しあるいは減少するように指示することにおいて、自分の理論を最後までやり通している。<76>

<注記と考察>

- (1) *On food (Über die Nahrung)* は ΠΕΡΙ ΤΡΟΦΗΣ の訳で、ローブクラシカルライブラリーでは *NUTRIMENT* と訳され、『ヒポクラテス全集 第2巻』では「栄養について」と訳されている。全体が寸言で成り立っており、<原文注記>70.でも引かれている。<原文注記>74.で指示されている箇所は、次のようになっている (訳は『ヒポクラテス全集 第2巻』)。

Φύσις ἐξαρκεῖ πάντα πάσι.

(Nature is sufficient in all for all.)

「自然は、あらゆる事物をあらゆる点で充足させている。」

- (2) ὑγιεινός は、健康によい、健康にかんする、という意味をもつ。
- (3) *patients* を「その指導を受ける者たち」と訳したが、ドイツ語版では単に *Körperpflege* (体の手入れ) となっている。γυμναστής が「体育教師」「競技者のコーチ」という意味をもち、*der Gymnast* が「(古代ギリシアの) 闘技者のトレーナー」という意味をもつので、*patients* は、そのような指導を受ける者、という意味あいであろう。
- (4) ドイツ語版にはここに (英訳されていない) 「それらは、その文体と思想世界からみて、むしろ4世紀の半ばないし後半に属する。」という一文が入っている。

ところで、『ヒポクラテス全集 第1巻』に収められている「人間の自然性について」について、訳者(大槻マミ太郎)はその概説文で「古来の有力な写本は、『健康時の摂生法について』を本書の後続部分としているが、しかし、ガレノスがこの全体を三つの部分に分けていることから、これらの一連のものが同一の手になると考えるには

問題が残る。が、紀元前四世紀前半にはこれらは成立していたと推定できよう。」と述べ、「健康時の摂生法について」の概説文では、「人間の自然性について」との関連についての指摘をしながら、「しかし語法や文体などから、両者が同時期に類似した手で書かれたことは疑いなかろう。」と述べている。

また、『ヒポクラテス全集 第2巻』に収められている「食餌法について」の訳者(近藤均)は、その第一巻の概説文で「成立年代は前五世紀末であろうとする研究者が大半である。リトレは著者をヒポクラテス自身であろうとしているが、定かではない。」と記し、また第二巻の概説文では「やはり前五世紀末に成立したと思われる『古来の医術について』の著者は、医術の由来に言及して、それを、食生活と健康との関係を追究する人類の永年に亘る努力の延長線上に位置付けた。その人類多年のためめぬ努力の成果をみごとに集約しているのが、この『食餌法について』第二巻といえよう。」と記している。また「食餌法について 第三巻」の概説文では、訳者は第三巻の内容を説明しながら、「…この部分は『健康時の摂生法について』の主題と相通じるところである。」と指摘し、第四巻に関しては、「さて、この『食餌法について』第四巻は、古くからむしろ『夢について』という表題で知られている。」と説明している。

イエーガーはこの叙述の前後で、同じ主題であっても多様な個性的な展開があること、また「食餌法について」と(カリュストスの)ディオクレースの断片集の執筆年代に関して、通常受け入れられているよりは後のものであること、を述べている。

(5)「疾患について」の冒頭は次のようである(『ヒポクラテス全集 第2巻』)。

「聡明な人ならば、人間にとってもっとも価値あるものは健康であるということをよくわきまえ、疾病の際には自分自身の判断で自分を助けることができなければならない。また、医者が自分の体に対して言ってくれることや処方してくれることをはっきりとわきまえることができなければならない。これらの点のひとつひとつを、一般人に相応な程度に知っていなければならない。これらのことは、以下のことを知って実行するときに、とくによく理解できるであろう。」

なお訳者(近藤均)は、概説文で「…本篇は、第一節に著者の意図が端的に示されているように、医師ではなく一般の人々を対象にして、病気の際の心得や対処の方法を説いたものである。」と述べ、上記訳文中の「一般人」について、次のような注を付している。

「カペラーは、ここの「一般人 (ιδιώτης)」を、いわゆる一般大衆ではなく医術の経験が浅い一般の医学徒というほどの意味にとっている。確かに、本篇の内容は、専門的な医術の心得の全くないいわゆる一般大衆に理解させるには、水準が高すぎるように思われる。とはいえ、カペラーの解釈も、この語の一般的な用法(『健康時の摂生法について』)などからみて明らかにやや無理がある。」

(6) イェーガーの叙述を理解するために、参考のため「健康時の摂生法」の(一)を下に引いておく(『ヒポクラテス全集 第1巻』より)。

「一般の人の食餌法はつぎのようにならなければならない。冬は、食物はできるだけ多目に、飲物はできるだけ少な目にする。飲物はできるだけ水で薄めないブドウ酒、食物はパンにして肉の料理はすべて焼いたものをとるようにし、この季節のあいだは野菜をできるだけ少しにする。こういう食餌をとっていると、体はもっ

とも乾性でしかも温かであるだろうから。だが春がやってきたら、そのときは飲物は冬よりも多目にして、ブドウ酒はもっと水で薄め、少しずつ飲むようにしなければならない。食物は柔らか目のものをとり、量は少な目に、パンはやめて大麦だんごのほうにかえ、同じ道理で焼肉料理は遠ざけ、すべてのものを焼くかわりに煮るようにし、春には野菜も少しはとる。それは、人が柔らか目の食物や、煮た肉料理、煮た野菜や生野菜をとり、同様にして飲物もできるだけたくさんの水で割ったものをできるだけ多くとることにより、夏にそなえられるようにするためである。しかし突然にではなく少しずつとることにより変化が大きくなりたくないようにしなくてはならない。夏になったら、軟かい大麦だんごによく水で割った多量のブドウ酒、それに肉料理はすべて煮たものをとる。実際、夏になったら、体が冷たくて柔らかくなるようにするために、こういう食餌をとらなければならない。というのも、この季節は暑くて乾燥しており、そのため、体が焼けるように熱くからからになるからである。そこで、以上のような生活の仕方によって、身を守っていかなくてはならない。同じ道理で、冬から春への推移と同様に、春から夏への推移にも、食物を減らし、飲物を増すようにして対処していけよう。同様に、夏から冬にかけては前と反対のことをすることによって対処する。秋には再び食物をもっと多くして、より乾燥したものをとり、肉料理もそのようにする。また飲物は少な目にし、あまり薄めないようにする。それは、飲物はあまり薄めないで少しの量をとる、食物はできるだけ多くして乾燥したものをとって、人が冬を健康に過ごすことができるようにするためである。というのも、こうすれば人はもっとも健康であり冷えることはもっとも少しですむであろうから。実際、この季節は非常に寒くて湿潤なのである。」

(7)「人間の自然性について」：前出(4)を参照のこと。

13. 医学と哲学の新たな統合とパイデアー概念の深化——「食餌法について」の執筆年代はアカデーメイアとイソクラテースの時代と推定される

<訳文>33p~36p

四巻本の大きな著作 *On diet* (「食餌法について」) は、異なる種類のものである。それは文字どおりの百科全書 (encyclopaedia, Enzyklopädie) であり、それは、著者が言うには、この特別な分野のすでに豊富な (全: gesamt) 文献をまとめる、また必要のあるところでは補充する、試みであった。<77>彼は哲学者であった；彼は体系的な理論を好んだ (Systematiker 体系主義者)；しかし彼をコンパイラー (a compiler, Kompilator コンピラートル)⁽¹⁾と呼ぶのは正しくない。これまで彼の著作を分析しようと努力してきた人たちによって、問題 (the problem, des Rätsels 謎) が解明により近づけられてきたのかどうかは疑わしい。彼らはそれを断片へと薄く切り、そうして、それらはさまざまな原典から写し取られたのだと言ってきた；これはヘーラクレイトス⁽²⁾を模倣するソフィストから、これはアナクサゴラス⁽³⁾の弟子から、これは栄養士ヘーロディコス⁽⁴⁾から、などなど。⁽⁵⁾<78>たとえば彼らは、著書の一定の部分はヘーラクレイトスのように思われると力説しておきながら、しかも、われわれはそれらにある自然哲学者に還元されるものとは区別することができるかと力説している。しかし今度はまた、その自然哲学者が完全にアナクサゴラス

の追隨者であるということはないのである：彼の思想のなかにはまったくエンペドクレス⁽⁶⁾的なものもあり、他の部分はアッポローニアのディオゲネース⁽⁷⁾を連想させる、といった具合である。われわれは、著者の、自分は多くの異なる影響を受けてきたが医者としてということにおとらず哲学者として普遍的である (universal, allumfassend すべてを包括する) ことを意図しているという主張、を受け入れるように本当に決心すべきである。このことはみな、彼がヒポクラテースよりも後の時代に属するということを証明するのであり、だから、(一般に信じられているように) 彼が、5世紀末の30年の間に「古来の医術について」を執筆した人物によって、哲学化した医者だと攻撃された人であるということは、最初からありそうもないことなのである。反対に、彼 (he, der Verfasser, Über Diät⁽⁸⁾) はあの著 (that book) が現われたあとに執筆していたように思われる、なぜなら彼はそれ (den „Empiriker “経験主義者) を読んでいたように見える。確かに、彼はその方向に従うのに、そして一般性で急に止めたりしないことに苦労している；いやそれどころか、彼は、医術においてはほとんどすべてのことが個人的要素にかかっていることをわざわざ繰り返し指摘している。彼はまた、精密さということが気になっていいる。彼が明言するには、「熱」、「冷」のどのような供給が身体にとって健康によいかを述べるような、大ざっぱな一般的規則を規定しても (初期の著作「健康時の摂生法について」⁽⁹⁾がそうするように)、何の役にも立たない。その代わり、彼はあらゆる種類の食べものの影響を精確に叙述することを熱望する。彼の著作は (それゆえ：daher) 古代において、詳細な情報の無尽蔵の宝庫として名高いものであった。^{<79>}ガレーノスは、その第二巻は、第一巻のさまざまな種類からなる哲学と他の異質の構成要素にもかかわらず、ヒポクラテースに値すると考えた。そしてたとえその多くがオリジナルではなく、その著者によって彼 (=ヒポクラテース) の資料から写し取られたものであるとしても、それでも彼 (=その著者) が、哲学と経験主義的医術との間の古い理論的論争を超えて進んできていること、そして熟慮して双方のこれらの要素を統一しようと試みていること、を認めないのは不可能である。

ヒポクラテース学派は、医者は患者の全体質 (constitution, Konstitution) に、彼の気象的、地域的環境に、そして彼に影響を与える宇宙現象における変化に注意を払わなければならないということを教えた；だからこの著者は、全自然 (universal nature, der ganzen Natur) への哲学的 (philosophical, theoretische 理論的) 関心を当然に (necessarily, unweigerlich 否応なく) 含むと考えている。「古来の医術について」の著者は、有機体のどの部分が他の部分を支配しているのかをどんなときも (at any one time, jeweils そのたびごとに) 知ることは決定的に重要であると考えた。⁽⁹⁾この人物もまた、その問題は決定的に重要であると考えたが、しかし彼は、人体がどのような部分から成り立っているのかを知らなければそれを解くことはできないと考えている。^{<80>}ディアグノーシス (diagnosis；διά-γνώσις：判定・診断⁽¹⁰⁾) はグノーシス (gnosis；γνώσις：知ること・知・認識) —万物の自然 (the nature of the universe, der gesamten Natur 全自然) の理解—と切り離すことができない。(その場合に：dann) その理解は、適切な養生法の詳細の知識—主として食物とそれが異なる体質に及ぼす影響の、しかしまた身体的な運動 (exercise, Anstrengungen 骨折り) と体育 (gymnastics, Übungen 演習) の、知識—をもたらす。それは、適切な滋養物 (nourishment, Ernährung 滋養・食物) と同じくらい重要である；そ

れにもかかわらず (たとえば: z.B.) 著作「古来の医術について」の著者は、他の多くの初期の医者たち (Ärzte⁽¹¹⁾) と同じように、そのことについてはまったく何も言わない。<81> 「食餌法について」の著者は、滋養物と運動の二つの対立的要素は、入念に系統的につり合うようにされなければならない、ということ教える。これは、初期の著者たちが専ら (chiefly, zunächst nur) さしあたりはただ 食物に適用してきた、釣り合いの考え (the ideal of symmetry, das Ideal der Symetrie) の適応 (an adaptation) である。それは、彼は暗示するのであるが、身体的な運動およびその栄養摂取 (nutrition, Ernährung) との関係に拡張されなければならない。<82> おそらく彼はここで、セリュンプリアのヘーロディコス—運動に食餌法 (regimen, der Diät) における主導的な位置を与え、それを体系的に論じた最初の人であるが—の理論に倣っている。自分もトレーナー (a trainer, Paidotribe⁽¹²⁾) であったので、彼 (=ヘーロディコス) は自分自身の病気を治すために体育 (gymnastics, der Gymnastik) を使い、それを、自分自身と他の人たちのために治療法の体系の中に (into a therapeutic system, zur Medizin) とり入れた。彼はそれをある程度は著名 (distinction, Berühmtheit 有名・評判) にしたのに違いないのであって、というのは彼は広く知られているのである。Visits (「異国の諸都市への訪問」=「流行病」) 第6巻の皮肉な著者は、彼は、彼が診る熱のある患者を、スポーツと蒸し風呂を与えすぎることによって死なせた、と言う;そしてプラトーンはジョークをもって、彼は自分自身を治せたのではなく、人為的に自分自身の死を、何年も自らを‘拷問する (torturing, marterte)’ ことによって引き延ばした、と言う。アリストテレースは、(彼を引き合いに出して: führt ihn als Beispiel dafür an) 多くの人自分たちのよい健康を適切に賞賛されずにいるのであり、というのは彼らがそれ (=健康) を保持する唯一の方法はあらゆる喜び (every pleasure, aller angenehmen Dinge あらゆる心地よいこと) を控えるということであるから、という彼の意見を述べている。プラトーンによれば、そのこと (=アリストテレースの意見) は、ヘーロディコスその人にもっともびったりしていることだろう。<82a>あるいはわれわれの著者 (=「食餌法について」の著者) は、彼は4世紀には明らかに非常に一般的であったこれらの批評文 (criticisms, Kritik) に応えようとしているので、滋養 (nutrition, der Ernährung) と身体的運動 (physical exercise, der Leibesübungen 身体運動・体育) との適切な調和を主張するようにあのような気配りをしている。⁽¹³⁾他の医者たちは医学の技術の‘独立性 (independence, Autarkie 自主独立性)’を熱烈に主張してきていたのであった。しかしわれわれの著者は医術のはるかに広い概念をもっており、彼はそれ (=その医術の広い概念) にあの考え (=医学技術の独立性の考え) を適用しようとはしないのであり、なぜなら、と彼は言うのであるが、それぞれの個人にふさわしい滋養 (nutrition, Nahrung) と運動 (exercise, Anstrengung) との精確な割合 (proportion, Maß 適度) を見出すのは不可能なのである。私はこのなかに、「古来の医術について」の著者に対する論争を見ないわけにはいかないのであり、というのはその著者の主要な理論がここですべて繰り返され、明確に反駁されているからである。この著者 (=「食餌法について」の著者) は、医療の技術は、それが個人とその必要の問題を解くことができないので、真の完全さに到達するのが妨げられている、という考えをもっている。<83>彼は、医者は、もしトレーナー (the trainer, der Gymnast 体育教師・(古代ギリシアの) 闘技者のトレーナー) のように彼が自分の治療する個人をいつも目の前におく (under his eyes,

unter seinen Augen 監督下におく) ことができるならば、自らの理想 (ideal, idealen Ziel 理想的な目的) により接近できるであろう、ということをしていわず認める気になっている。しかしそんなことは不可能である。<84>

彼は、大部分の医者たちがするように、病気が確固たるものになってしまってから始めるようなことを望んではいない。彼はそれゆえに、注視されるならば発病を防ぐことになるであろう、詳細な食餌法を完全に書く。これは prodiagnosis (προ-διά-γνωσις プロディアグノーシス: あらかじめの判定・診断) でもあり prophylaxis (προ-φυλαξις プロフュラクス: あらかじめの守り・予防) でもある— (まさしく: eben) 彼自身の着想であるものである。⁽¹⁴⁾彼の認識からは、個人は、もし自分自身が今よりもはるかに医者職務に協力しようと、また自分自身の治療において意識的な補助者として振る舞おうと、する気にさせられることがなければ、ほとんど適切に治療されることはない、ということが生じる。<85> 第1巻で自らの一般的仮定とされるべき自然哲学の理論を定めたあと、著者は第2巻でさらに進んで、さまざまな気象や地域の健康に与える影響を、引き続いてあらゆる種類の野菜や食用動物の同様の影響をもっともささいなものまで叙述する。これは、文明化されたギリシア人 (the civilized Greeks, dem griechischen Kulturmenschen ギリシアの文明人) が意のままにできた日常の食物 (diet, Kost 食べもの) のおどろくべき豊富さと多彩さを認識する機会をわれわれに与える。その医者の一覧表は、非常に多くのドーリスやアッティケーの喜劇で早口にしゃべられる長い献立表よりももっと豊富でさえある。⁽¹⁵⁾それは、彼の残りの論文とまったく同じように体系的である。彼は、膨大な植物食品 (plant-foods, der Pflanzennahrung) を穀草 (cereal, Cerealien) と野菜類 (vegetable types, Gemüsesorten) に分けることで始める。薬草 (herbs, Kräuter) と果物 (fruit, Obstsorten 果物類) だけは省かれていて、それらは食肉のあとに現れているが、それは、(食餌法的見地から) それらが 'delicacies 珍味' ないし 'relish 薬味' (Zukost 付け合わせ) (ὄψον 副食物・薬味) として分類されているからである。⁽¹⁶⁾動物性食物 (animal foods, die tierischen Nahrungsmittel) は、哺乳動物 (そしてそれらは成長した哺乳動物と若い哺乳動物とに小分けされる)、鳥、魚、そして甲殻類 (shellfish, Schaltiere) に分けられる。野生動物と家畜は、食物としてのその多様な効力が吟味される。このあとに、動物が産み出したものと、それらを用いた料理がくる: つまり玉子、ミルク、チーズ⁽¹⁷⁾; (ただ: nur) 蜂蜜は飲物とともに、通常それはそれらのものと混合されるので、扱われる。⁽¹⁸⁾

(本13節は継続研究 (9) へ続く。)

<注記と考察>

- (1) コンパイラー compiler: (資料をいろいろな本から寄せ集める形で) 著作をする人
- (2) ヘーラクレイトス: 前540年頃~前480年頃。ギリシアのイオーニア学派の哲学者。本継続研究 (6) の<原文注記>の<注記と考察> (5) を参照のこと。
- (3) アナクサゴラス: 前500年頃~前428年頃。イオーニア出身の自然哲学者。本継続研究 (6) のII. 3. (9に修正する) の<注記と考察> (5) を参照のこと。
- (4) ヘーロディコスは、「流行病」第六卷第三章18に出ている人物のことであろう。訳者(近藤均)は、「ヒポクラテスが師事したとされている医者。『エペソスのソラノスによるヒポクラテス伝』の冒頭パラグラフ参照。恩師筋の人物さえ名指しで公然と批判され

- ている点に、当時の医療集団内部の自由闊達な雰囲気的一端を読みとることができる。」と注記している(『ヒポクラテス全集 第1巻』)。なおヘーロディオスについては<原文注記>82a. でプラトーン『国家』406a-b; アリストテレス『弁論術』1.5.1361b5; ヒポクラテス「流行病」6.3.18. が指示されている。この原文注記の<注記と考察>(31)を参照のこと。
- (5) イェーガーがここで指摘していることは、「食餌法について」(とくに第一巻)の訳者による(研究成果を反映したものとしての)諸注記を見れば理解できる(『ヒポクラテス全集第2巻』)。
- (6) エンペドクレース: 前495/490年頃~435/430年頃。ギリシアの哲学者で神秘宗教家。「イタリアの医学派の創設者とも見なされている」という(松原著)。本継続研究(5)の第II章2節の<注記と考察>(23)を参照のこと。
- (7) (アッポローニアの)ディオゲネース: 前499年頃~前428年頃。折衷主義の自然哲学者で、「ソクラテース以前の哲学者」のうちの最後の人と見なされている、という(松原著)。II. 11. <注記と考察>(4)、本継続研究(6)<原文注記>の<注記と考察>(2)を参照のこと。
- (8) 「健康時の摂生法について」の訳者は、その概説文で「ここでは、普通の人が健康を保つために、季節・年齢・体質に応じてとるべき食餌法、さらにその一環としての入浴・運動・衣服などについていろいろの指示がなされている。」と説明している(『ヒポクラテス全集 第1巻』)。
- (9) たとえば「古来の医術について」の19節末尾では、「けれどもその他の人体に関するあらゆるものは、より多くのものと混合すればするほど、それだけいっそう穏やかにかつは良くなるのである。人間がもっとも良い健康状態になるのは、全体が煮熟していて固有の力はいっさい示さず静かであるときなのである。」と述べられている。イェーガーは、このような「混合」「調和」の考え方のことを述べているのであろう。
- (10) 「食餌法について」1.2の文章に *προ-διά-γνωσις* ということばがあり、『ヒポクラテス全集 第2巻』では「あらかじめ診断をください」と訳されている。それに倣って、*διά-γνωσις* の訳に「診断」を入れておいた。
- (11) ここはドイツ語版を用いた(英語版では *physicists*: (自然科学者たち) となっている)。
- (12) *Paidotribe*: *παιδο-τρίβης* (体育教師)
- (13) ここは直接的には、少し手前の「食餌法について」の著者は、滋養物と運動の二つの対立的要素は、入念に系統的につり合うようにされなければならない、ということを教える。」という叙述を指しているのであろう。
- (14) *προ-διά-γνωσις* は、ローブクラシカルライブラリーにおける英訳では *the forecasting* (予測すること) となっている(『ヒポクラテス全集 第2巻』では「あらかじめ診断をください」と訳されている: 前出(10))。*προ-φυλαξις* (プロフュラクス) は「あらかじめの守り」と訳しておいたが、*prophylaxis* (*Prophylaxe*) はそのまま英語(ドイツ語)の「予防」である。<原文注記>の<注記と考察>(32)を参照のこと。
- (15) 「食餌法について」第2巻に述べられている食餌法の具体例の豊富さは驚くべきものである。その輪郭を訳者(近藤均)は概説文で、小論12節の<注記と考察>(4)の

文章に続き、次のように説明している（『ヒポクラテス全集 第2巻』）。

「本篇には、穀物類・肉類（獣・鳥）・魚介類・野菜・果物・各種飲料など、ありとあらゆる飲食物の人体に及ぼす効力や害が、「熱（温）」「冷（寒）」「乾」「湿」という四つの基本性質との関連で詳細に解説されている。扱われている飲食物は百数十種にも及び、あわせて、煮る・焼くなどの調理法にも関心が払われている。さらに、後半部では、飲食物と並んで健康管理に欠かせない沐浴・睡眠・各種のスポーツなどの効能や害について言及され、とくにスポーツの個所は体育史の資料としても貴重である。なお、冒頭部には、自然環境と健康との関わりあいが総論的に述べられているが、この箇所は、『空気、水、場所について』の主題と相通じるところである。」

(16) ここでイエガーが指摘しているのは、「食餌法について」第2巻の18、19節のことである。

(17) ここでイエガーが指摘しているのは、「食餌法について」第2巻の14、15節のことである。

(18) ここでイエガーが指摘しているのは、「食餌法について」第2巻の17節のことである。

なおイエガーはこの下りで、「食餌法について」第2巻の叙述の、その体系性を明示しようとしている。

《原文注記》

56. プラトーン『パイドロス』270c-d⁽¹⁾；p22（本継続研究（6）のⅡ．3．～<注記と考察>（7）に照応する）。

57. プラトーン『パイドーン』96af.⁽²⁾

58. このことは、ギリシア医術についての本だけではなく、W. Theiler の貴重な、啓発的な著書、*Geschichte der teleologischen Naturbetrachtung bis auf Aristoteles* (Zurich 1925)（『アリストテレスに至るまでの目的論的自然考察の歴史』）、でさえ当てはまる。Theiler は、ほとんど哲学者に限定して扱っている；彼はヒポクラテスの全集からほんの少しの（a few, vereinzelte ばらばらの）類例を引き合いに出しているのであるが、これらが、（後の：späten）エラシストラトス⁽³⁾（appendix, p.102）への言及に加えて、彼（=Theiler）の医学への間接的な言及のすべてである。自然を意図的な（deliberate, bewußten）技術と比較することが彼の主たる関心である；がしかし彼は、自然は無意識的な目的性（an unconscious purposefulness, die unbewußte Zweckätigkeit）をもつというヒポクラテスの学説に真剣な注意を払うべきであった。それは、現代科学にとってもっとも重要となる目的論（teleology, der Teleologie）の種類のもの、まだ目的（telos, Telos⁽⁴⁾）ということばがそのために使われているのではないけれども、そういうものであった。ヒポクラテスの医術のこの側面のより公正な評価への傾向（a tendency, einen Umschwung 決定的変化）が、A. Biers' *Beiträge zur Heilkunde* (*Münchener Medizinische Wochenschrift* 1931, no.9f.) に現れている。

58a. T. ゴンペルツ, *Griechische Denker*（『ギリシアの思想家たち』）1（4th edition）p.261,⁽⁵⁾ 彼は、医者たちにギリシア哲学の発達における適切な位置を与えた最初の人であるが、

それにもかかわらず、彼らの受け止め方 (attitude, Beurteilung 評価) において典型的な実証主義者 (a typical positivist, der typische Vertreter des positivistischen Zeitalters 実証主義の時代の典型的な代弁者) であった。このことは、彼がヒポクラテースとデモクリトス⁽⁶⁾とを緊密に関係するものとして扱っているという事実によって示されている；このことを裏書きするために、彼は、これらの人びとの架空の往復書簡 (the fictitious correspondence, Briefroman 書簡体小説) に訴えたのであるが、それは後の時代に、彼らを何とかして結びつけるために捏造されたものである。

59. 「古来の医術について」の第5章の終わり、第9章；「食餌法について」の3巻69；そして食餌法関連の論文をあまねく、参照のこと。
60. 「古来の医術について」14章 (後半)⁽⁷⁾；「空気、水、場所について」12章；「人間の自然性について」4章⁽⁸⁾、を参照のこと。ἀκραιότης は「人体の部位について」26.⁽⁹⁾その他の場所に出てくる；調和 (harmony, der Harmonie) の概念は「食餌法について」1.8 - 9.⁽¹⁰⁾ ἀρμότιον, μέτριον, σύμμετρον に関しては私の「カリュストスのディオクレース」47f. を参照のこと。⁽¹¹⁾
61. プラトーン『パイドーン』93e⁽¹²⁾、『法律』773a⁽¹³⁾、『ゴルギアース』504c⁽¹⁴⁾ は、健康を身体の適切な秩序 (order, Ordnung (τάξις: 秩序)) と定義することによって、同じことを述べている。アリストテレスの『断片集』7ワルツァー (Walzer), p. 16 (45 ローゼ Rose), の、身体における健康、強さ、美しさの由来ないし原因 (the origin and cause, Ursache 原因) としての調和 (symmetry, Symmetrie) について、も参照のこと。⁽¹⁵⁾
62. たとえば、「急性病の摂生法について」15と57を参照のこと。⁽¹⁶⁾
63. ヘーラクレイトスが、身体の傷つけられた箇所に急ぐ魂 (psyche) を、ハエによって傷つけられてしまったクモの巣の箇所に急ぐ蜘蛛と比較するとき (断片集67a; Diels)、彼はわれわれにヒポクラテースの、自然は病気に対して急いで助ける (hastens to help, das Zuhilfeeilen) (βοηθεῖ: 救助に駆けつける、治療する) という考え方を思い起こさせる (reminds, erinnert)。その一節は、ヘーラクレイトスの箴言というよりは医学思想のような印象を与える。⁽¹⁷⁾
64. 私の『アリストテレス』(Berlin 1923), p.74 を参照のこと。(ドイツ語版では p.75 と指示されている一冊)
65. テイラーの著書 (《58》で引いている), p.13 f. を参照のこと；彼は、全てのこの種の考え方をディオゲネースにまで遡って調べようとしている。
66. テイラー, p.52, はこの論文から一つの例を引いている；(それだけではなくさらに: aber auch sonst) その著作の全体の論調と内容が、それが目的論的思考法によって鼓舞されていた、ということを示している。
67. 「食餌法について」1.11.
68. 「食餌法について」1.15.
- 68a. 「流行病」(=「異国の諸都市への訪問」) 6.5.1: νόσων φύσεις ἰητροί. (18)
69. (アッポローニアの) デイオゲネースの断片集 (ディールス編) の5。また断片集7と8も参照のこと。⁽¹⁹⁾
70. *On food* (『栄養について』) 39: φύσεις πάντων ἀδίδακτοι.⁽²⁰⁾
71. エピカルモス 断片集4 Diels:

τὸ δὲ σοφὸν ἀ φύσις τόδ' οἶδεν ὡς ἔχει
μόνα· πεπαιδευται γὰρ αὐταύτας ὕπο.

著者は、雌鶏がその卵を孵化する仕方のことを話している；彼は、それはあらゆる生けるものにおける持って生まれた推理力 (the natural reasoning power, die natürliche Vernunft) 持って生まれた思考力) の一例だと言っている。⁽²¹⁾ もし確かであるならば、これは、*παιδεία* の最初の例証でないにしても、アイスキュロスの『テーバイ攻めの七将』18よりも遅いということはまずないだろう (*Paideia* 1, 283を参照のこと)。しかし、アイスキュロスにおいてはその言葉 (= *παιδεία*) は、*παιδων τροφή* (子どもたちの養育) だけを意味している：エピカルモスにおいては、それ (= *παιδεία*) は、とりわけ (前) 4世紀にソフィストたちの学説 (the teaching) をとおして (初めて：erst) 獲得した、‘より高度の教養 (higher culture, höherer Bildung)’ という意味を (すでに：schon) もっている。ディールスはその断片を、(あとになってから：später) エピカルモスの作として贋作された箴言集の一つに属する、という疑わしさをもたれていない少数のものの中に、載せている。しかし、われわれが明らかにしてきたような *paideia* という語の歴史 (the history, Bedeutungsentwicklung 意味内容の発達) からわれわれが判断し得る限りは、この断片は、その他のものと全く同様に (後の：späte) 偽作である。⁽²²⁾

72. *Paideia* I, 309f. を参照のこと。あのソフィストのバイデイアーと農業との比較を思い出させる初期のものが、ヒポクラテースの「法」3に見出されるが、そこではその比較は (the comparison, der Gedanke von der Bildung 教育の考察は) とくに医学教育 (medical education, die ärztliche Spezialbildung 医者の特門教育) に移されている⁽²³⁾；別のものがプラトーンの『ティマイオス』77aにある—プラトーンは才気に満ちて比較を裏返しており、農業を自然の教育 (the *paideia*) として叙述している。⁽²⁴⁾ (なおドイツ語版には、この後に「両方とも4世紀に作られたと言ってよいだろう。」の一文がある。)
73. *Visits* 6.5.5. を参照のこと。Deichgräber (《原文注記》15. (= 本継続研究 (5)) で引いている) は、その一文を、‘The soul’s wandering (within the body appears) to men (to be) thought.’ (‘(身体内部の) 魂の放浪は人間にとっては思考 (のように見える’) (‘Das Umherwandern der Seele (im Körper erscheint) dem Menschen (als) Denken.’) (‘(身体の中の) 魂の放浪は人間にとっては思考 (として見えてくる’) という意味に解釈している。しかし、*Ψυχῆς περίπατος φροντίς ἀνθρώποισι* は、そのようなことを意味するはずはない。⁽²⁵⁾ 「食餌法について」2. 61においても、思考 (*μέριμνα*) は ‘exercise 運動・修練 (Übungen 鍛錬)’ と見なされている。ここでの新味は、運動 (exercise) という考えが身体から魂 (soul, die Seele) に拡張されたということである。⁽²⁶⁾
74. 「栄養について」15. (ドイツ語版には (IX102L.) の指示もある)
75. *Littre* VI, 72
76. 「健康時の摂生法について」7. (ドイツ語版には (VI82L.) の指示もある) における体育 (gymnastic exercise, die gymnastischen Übungen) に対する詳細な処方参照のこと。
77. 「食餌法について」1. (*Littre* IV, 466).
78. この分野におけるもっとも重要な著作は、C. Fredrich’s *Hippokratische Untersuchungen* (Philologische Untersuchungen, ed. by Kiessling and Wilamowitz, 15, Berlin, 1899) : p.81f

を参照のこと、またその主題についての初期の文献に関してはp.90を参照のこと。Fredrichの著作は、多くの新しい方向を打ち出しているが、しかしその資料分析の方法において機械的過ぎる。

79. 彼は、医者の方箋がどんな種類の特殊状態にも適応され得るように、あらゆる飲物、あらゆる食物、そしてあらゆる運動 (exercises, Übungen) の影響を描写し始める。一般的なもの (what is general, Allgemeinen) (κατὰ παντός) と特殊なもの (what is special, Besondern) (καθ' ἑκάστων) との間の鋭い区別はこの著者の方法の特色である：(そのため：dazu) 彼の、2.37と2.39にある、原理についての見解を参照のこと。⁽²⁷⁾ 広い一般的な論述を避けて特殊問題に集中するように固く決心している医者が、「古来の医術について」の著者によって曖昧な一般化のかどで非難されることはどうてあり得ないことであった。論理学におけるこの κατὰ παντός καθόλου の学説は、アリストテレスによってより詳細に打ち立てられた：(そのことは：das) 「食餌法について」の執筆年を推定する上で重要なことである。⁽²⁸⁾
80. 「食餌法について」1.2 (冒頭)。これは、あの哲学的な (naturphilosophische 自然哲学の) 探究 (ιστορίη) の方法を明確に拒否する、「古来の医術について」20への回答のように思われる。⁽²⁹⁾
81. 特徴的に、「古来の医術について」の著者は、医術は病人向きの食事の発達から起った、と述べている。
82. 「食餌法について」1.2 (Littre IV, 470)⁽³⁰⁾
- 82a. ヘーロディオスについては、プラトーン『国家』406a-b；アリストテレス『弁論術』1.5.1361b5；ヒポクラテース「流行病」6.3.18.を参照のこと。⁽³¹⁾
83. 「食餌法について」1.2 (Littre IV, 470)⁽³²⁾
84. 同上。
85. 「食餌法について」1.2 (Littre IV, 472)；この文章はまた 'prodiagnosis' という新しい考えを含んでいる。Prophylaxis は後のことばであるが、しかしそれは、この著者が成し遂げようとしていることがらにとってよい記述である。彼は prodiagnosis と prophylaxis とを一体にしようとしている。⁽³³⁾

<注記と考察>

- (1) 『パイドロス』270c-d、さらにeまで確認しておく、以下のようなのである（藤沢令夫訳、岩波文庫、1967年：挿入した英語、ギリシア語はローブクラシカルライブラリーに拠る）。

「ソクラテス　ところで、魂の本性 (the nature of the soul, Ψυχῆς οὐν φύσιν) を理解するのに、その全体の本性をはなれて満足に理解することができると思ふかね。

パイドロス　いやしくもアスクレピオス派の医学者、ヒポクラテースの言葉を多少とも信じなければならぬとすれば、身体についても、あなたが言われた方法をとらないと、その本性を理解するのは不可能だとのこと。

ソクラテス　そうだと、君、ヒポクラテースの言うことは正しい。けれどもぼくたちは、ヒポクラテースだけに頼っていないで、さらにものの道理そのものにたす

ね、道理の示すところ (our reason, λόγος) がヒポクラテスの言葉と一致するかどうかを、しらべてみなければならぬ。

パイドロス 賛成です。

ソクラテス それでは、この本性の問題について、ヒポクラテスと正しい道理とがどのようなことを述べるか、しらべてみたまえ。——そもそも、どのようなものにせよ、あるものの本性について考察するには、次のようなやり方によるべきではなかろうか。まず第一、ぼくたちがあるものに関して、自分でも技術を身につけ、また他人を技術家にしたてるだけの能力をもちたいとのぞむならば、技術を向けるべきその対象が、単一なものか、それとも多種類のものかをしらべること、つぎに、もしその対象が単一のものなら、そのものが持っている機能をしらべてみる。すなわち、それは本来、能動的には何に対してどのような作用をあたえ、受動的には何からどのような作用を受けるとような性質のものであるかを、しらべるのである。またもし、その対象が多種類のものならば、その種類を数え上げ、しかるのち、そのひとつひとつの種類について、単一な種類の場合にやったのと同じことを、つまり、それが本来何によってどのような作用をあたえ、あるいは何からどのような作用を受けるような性質のものかを、見なければならぬ。

パイドロス おそらく、ソクラテス、そうかもしれません。

ソクラテス いや少なくとも、こういった手順をふまない方法などというものは、盲人の歩みのごとし、と行ってよいだろう。だが、何ものかを、いやしくも技術によって追求しようとする者が、めくらにたとえられたり、つんぼにたとえられたりするようなことは、むろん、あってはならない。明らかに、もしひとが技術にしたがって誰かに弁論を授けようとするならば、その弁論が適用されるべき対象の本性がいかなるものであるかを、正確に教え示すべきである。ところで、その対象とは何かといえば、魂にほかならないであろう。

パイドロス たしかに。

ソクラテス だから、彼の努力のすべては、この魂の研究に向けられるのではないか。なぜなら、彼が一つの確信をうえつけようと試みるのは、ほかならぬこの魂の中なのであるから。そうだろう？

パイドロス そうです。

- (2)『パイドーン』の該当部分は、ソクラテスがケベスとの対話で、自らのこととして、自然哲学への期待が絶望に変わり、「真の意味の原因とは何か」という問いに接近していく (= 自らの探究の変遷を語る)、圧巻の個所である。ここでは、その輪郭を掴むため、複数の個所を抜粋して記しておく (藤沢訳「パイドーン」、『プラトン 世界文学大系 3』筑摩書房、1959年、所収、に拠る)。

「ぼくはね、ケベス、若いころ、自然の研究とよばれるあの知識を求めることに、それはもう、たいへんに熱中したことがあった。何とすばらしい知識だろうと、ぼくには思えたのだ——ひとつひとつのものの原因を知り、それぞれのものによって生じ、何によって滅び、何によって存在するかを究めるといふこと！」

「それが、そのとき、こうした研究のために、ぼくはすっかりめくら同然になっ

て、そういう、以前には知っていると思っていた事柄までも、さっぱりわからなくなってしまったのだ。」

「あんな考え方は、もうまっぴらだ。」

続いてソクラテースは、アナクサゴラスの書物に出会った喜び、期待を語り、次のように語っていく。

「期待はまことに大きかったが、友よ、みるみるうちにそれはぼくから去っていった。」

「彼（＝アナクサゴラス）のやり口がぼくにあたえた印象を、できるだけ近い譬えで説明してみようか。——ある人が、ソクラテースはそのすべての行為を知性によって行うのだと言う。ところがいざ実際に、ぼくが行うひとつひとつの行動の原因をあげようと試みる段になると、こんなことを言うのだ。まず、ぼくがいまここに座っているのはいかなる原因によるかといえば、ぼくのからだがいりいりの骨と腱から形づくられていて、骨はかたくて関節により各部分に分かたれ、腱は伸縮できて肉や皮膚とともに骨のまわりを包み、これら全部は皮膚によって保持されている。そこで、骨の各部分は相互の接合部を楔りどころにして自由に揺れ動かされる状態にあるから、腱の伸縮によってぼくがいま肢を折り曲げることが可能になり、まさにこの原因によって、ぼくはここでこうして脚をまげて座っているのだと。あるいはまた、ぼくがこうして君たちと話し合っていることについても、別の同じような原因をあげる。音声だとか、空気だとか、聴覚だとか、その他そういったものを無数に持ちだしてそれを原因と称し、真の意味での原因をあげることをすっかり等閑に付してしまうのだ。真の意味の原因とは何か。それはほかでもない。アテナイ人たちがぼくに有罪の判決を下すほうが善いと思ひ、それゆえにぼくはぼくでもた、ここに座っているほうが善いと思ひ、とどまって彼らの命じる刑には何でも服するのが、より正義であると思ったこと、このことなのだ。」

「しかしながら、ぼくが何かを行うのは——それも知性によって行うのだというのに——そういったもののゆえに行うのだと言って、最善の事柄をえらぶからだとは言わないのは、はなはだ軽率きわまる言い方といわなければならない。ほんとうの原因と、それがなければ原因が原因としての働きをなしえないところのものと、この両者は全く別のものであるという、こんな区別ができないとは！ 見うけるところ、多くの人々が暗中を模索するようなやり方で、『原因』という不当な名前で呼んでいるのは、この種の必要条件のことであるようにぼくには思われる。」

「彼らは、これら天地万物が現在、まさに最善の位置を占めるような仕方で置かれていることを可能にした力、そういう力を探し求めもしなければ、それが人知を超えた強さをもつということ、思ってもみないのだ。」

「善というひとつの適正な力（デオノ＝結束するもの）が、文字どおり万物を結束し統合するということを、彼らは、何ひとつ考えないのだ。」

- (3) エラシストラトス：前315年頃～前250/240年頃。ギリシアの医師・解剖学者・生理学者で、生理学の祖とされる。彼は「死体解剖や生体解剖を通してヘーロピロスの研究を発展させ、運動神経と交感神経とを明確に区別し、咽頭蓋や腸間膜の乳糜管を観察、

脳の作用や心臓の弁膜の働き等について説明した。」という。また彼は、「[「全器官は、他の組織と3手段すなわち動脈・静脈・神経によってつながっている」と主張、ヒポクラテース流の体液説を退け、デーモクリトスの原子論とストラトーンの真空論に基づいた独自の見解を述べた。]という。さらに、「[「自然は一つして無益なことをしない」と信じた彼は、全生理現象を自然的原因によって説明しようとし、薬物・下剤・瀉血の多用に反対して食事・入浴・運動などの養生法を勧めた。カテーテルを発明し、サモスに医学校を設立したとも伝えられ、その学派は後2世紀のガレーノスの頃まで栄えた。]という。(松原著)

- (4) telos, Telos : τέλος : 成就、結果、完成、最終目標、目的。
- (5) T. Gomperz (ゴンペルツ) : 1832年~1912年。オーストリアの古典文献学者、哲学者で、「ギリシアの文献学、哲学史の著述多く、主著『ギリシアの思想家達』3巻はプラトン以降前3世紀までをあつかったもので、とくにアリストテレスについてくわしい。」という。『ギリシアの思想家たち *Griechische Denker*』は1893~1909。(『哲学事典』平凡社)
- (6) デーモクリトス : 前470/460年頃~前371/356年頃。ギリシアの哲学者。本継続研究(5)のII. <原文注記>の<注記と考察>(7)を参照のこと。
- (7) 指摘されている「古来の医術について」第14節の後段は、以下のとおりである(小川政恭訳『ヒポクラテース 古い医術について 他八編』岩波文庫、1963年)。

「…なぜなら人体中には塩辛いもの、苦いもの、甘いもの、酸いもの、渋いもの、無味なもの、その他その種類と強度において千差万別のものが含まれているのである。さて、これらはたがいに混交され(μειγμένα(μειγνύμι 混合する), mixed) 調合され(κεκρημένα(κεράννυμι 混ぜる・調節する), compounded) た場合は、(その作用は) 顕著とならず、また人体を害しもせぬ。ところがこれらのどれかが分離され独立するというと、顕著となり人体を害するのである。しかし食料のうちわれわれに不適當で食べて害になるものは、そのひとつひとつは苦いか塩辛いか[まざりけがないか] 酸いか、その他まざりけがなくキツいかである、それゆえこれらによってわれわれは不調にされる。それは人体の中で分離されたもの(体液)によるのと同様である。しかしすべて人間が食べたり飲んだりしている限りの食料は、明らかにこのような混りけがなく顕著な香味をもってはいないのである。味覚と食欲を満たすために調製され調味されたものを除けば、たとえばパン、菓子等々のように人がもっとも多量にかつ日常的に用い慣れているところのものなのである。これらがごく大量に人体に入る場合でも、なんら身体の諸機能の不調や孤立化がおこるものではなく、力と成長と滋養とが生ずるのであるが、その理由はそれがよく混合されており、混りけないものをもキツいものをも含まず、全一にして(ὅλον ἐν, simple whole) 単一(ἀπλοῦν 単一の, a single) となっているためにほかならない。」(挿入したギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。)

- (8) 「人間の自然性について」第四節は、下記のとおりである(上記、小川訳)。

「さて、人間の身体はその中に血液、粘液、黄および黒の胆汁をもっている。これらが人間の身体の自然性(ἡ φύσις τοῦ σώματος, the nature of his body)であり、

これらによって病苦を病みもし健康 (ὕγιαρνεί, health) を得もする。いちばん健康を得るのは、これら相互の混合の割合 (κρήσιος, compounding) と性能と量が調和を (μετρίως, duly proportioned to) 得、混合 (μεμιγμένα, mingled) が十分であるばあいである。病苦を病むのは、これらのどれかが過少か過多であったり、身体内で遊離して全体と混合していなかったりするばあいである。もしこれらのどれかが遊離して孤立するならば、その遊離した身体部位が病気になるばかりでなく、それが位置を占め流れ寄せた身体部位がその過度の充満のために苦しみと痛みをひきおこすのである。実に、それらのどれかがその溢れた量以上に体外に流れ出るばあいには、その空虚は苦痛を与える。他方また、体内で空虚と移動と、他からの分離をつくり出すばあいは、上述の仕方です重の苦痛を、すなわちそこから分離して来た部位と過度に充満した部位とにおける苦痛をひきおこすことが必至である。」(挿入したギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。)

- (9)「人体の部位について」(*On the parts of man* あるいは *Places of man*) の26の前半は次のようになっている(『ヒポクラテス全集』第2巻)。

「乾性胸膜炎は流れによらなくとも、のどの渇きが強制されて肺があまりに乾燥すると生じる。肺は本来乾いているので、自然な状態よりもさらに乾かされるとしおれて、その力が弱く (ἀκρατής, weak) なる。それ (ἀκρασίας, its weakness) が原因となって肺は側胸部の方に傾いて、それと接触する。」(挿入したギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。)

ἀ-κρατής は、「力のない」「統御できない、自制できない」という意味がある。

- (10)「食餌法について」第1巻の8について、下記に引いておく(『ヒポクラテス全集』第2巻)。そこでは、精液のこと、精液が子宮に入り胎児、あるいは男・女が発生することなどが論じられているが、その中の音楽理論が述べられている箇所について、訳者の近藤は欄外注記で、「八度がいわゆるオクターブで、物理学的には振動数が二倍になる。音楽に関しては、前六世紀に南イタリアでピュタゴラスが組織した教団で数学や天文学とともに尊重されて発展を見たとされる。本篇の音楽関係の事柄には同教団の思想的影響が当然想定されるが、詳細は不明。」と説明している。

「各部分は、場所がもはやそれを受け入れられなくなり、可能なかぎり大きく広がれる十分な栄養がなくなるまでの間は、同じ状態を保っている。ついで女の質のものであれ男の質のものであれ同様に、力づくで強制的に追いたてられてより大きな場所に入る。割り当てられた運命を先に成就したものがまず分離され、と同時に、混じり合う (συμμίσγεται, commingle)。実際、それぞれはまず分離され、と同時に混じり合う (συμμίσγεται, commingles) ののである。場所を変え、適切に調和して (ἀρμονίης ὀρθής, a correct attunement) 三つの協和 (συμφωνίας τρεῖς, three harmonic proportionals) すなわち四度と五度と八度をもった場合は、それは以前と同じものを糧として生きて成長する。しかし調和 (ἀρμονίης, the attunement) せず、低い音が高い音と四度、五度、八度のいずれの関係でも協和し (σύμφωνα, harmonize) ないならば、ひとつの部分が調子はずれでも全体の和音がだいなしになる。実際、調和 (προσαείσαι, consonance) しないであろう。各部分は相応な時期がこないうちに大きい状態から小さい状態へ変化してしまう。

何をしたらよいかかわからないからである。」(挿入したギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。)

(11) カリュストスのディオクレース：前4世紀頃の名医(松原著)。

(12) 『パイドーン』の指摘されている個所は下記のとおりである(藤沢令夫訳、『プラトン 世界文学大系3』筑摩書房、1959年、所収)。「魂=調和」という前提での対話が展開されている。

「では魂にしても、ある魂と他の魂をくらべて、まさに魂であることの程度に完全不完全の差がない以上、もともといかに調和されてあるかという点でも、そこに程度の差はないのではないか」

「そのとおりです」

「しかるに、そうだとすれば、魂が自分の中に調和(ἀρμονία, harmony) ないしは不調和(ἀναρμωστία, discord) をもつ程度にも、差はないはずだろうね」

「ええ、たしかに」

「さらに、もしそうだとすれば、悪徳は不調和(ἀναρμωστία, discord) 徳とは調和(ἀρμονία, harmony) であるという前提にたつとき、ある魂が他の魂とくらべて、自分の中に徳ないしは悪徳をより多くもつというようなことが、はたしてありうるだろうか」

「ありえません」

(挿入したギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。)

(13) 『法律』の指摘されている個所は下記のとおりである(森進一・池田美恵・加来彰俊訳、岩波文庫(上)、1993年)。

アテナイからの客人 どうもありがとう。ではわたくしたちは、よい父親から生まれた子供に向かって、こう呼びかけるとしましょう。

「息子よ、お前は思慮ある人びとにとって、評判のよい結婚をしなければならない。彼らはお前に、貧しい人びととの結婚を避けたり、金持との結婚をとくに追い求めたりせずに、もし他の条件が同じなら、つねに低い方を選んで結婚を取りむすぶように、と忠告するであろう。というのは、それが国家のためにもなり、また結婚する両家のためにもなるであろうから。[国全体が] 均質で(ὀμαλόν, evenly balanced) 釣り合いがとれている(ξύμμετρον, symmetrical) ということは、徳にとって、極端よりもはるかに勝っているのだから。…」

(14) 『ゴルギアース』の指摘されている個所は下記のとおりである(加来彰俊訳、岩波文庫、1967年)。

ソクラテス そうだ。では、今度は、魂のなかの、規律と秩序とから生まれている状態には、どんな名前がついているのかね。身体のとくと同じように、その名前を見つけて、言ってみるようになってくれたまえ。

カルリクレス しかし、どうしてあなたは、自分で言おうとしないのかね、ソクラテス。

ソクラテス いや、そうするのがよければ、ぼくのほうで言うことにしよう。それで、君のほうは、ぼくの言うことが当たっていると思えば、肯定し、そうでないと思えば、反駁して、ぼくの言うなりにならないでくれたまえ。というのは、ぼ

くの思うところでは、身体の規律正しい状態には、「すこやかな（健）」という名前がついており、そしてそのことにもとづいて、身体には健康をはじめ、その他の身体上の徳（卓越性）が生まれてくるわけだ。どうだね、これはこうなのかね、それとも、ちがうのかね。

カルリクレス そのとおりだ。

- (15) アリストテレスの『断片集』は、それを編集した研究者たち（ローゼ、ワルツァー、ロス）によって構成が異なっており、その対照は複雑である。ここでは、イエーガーが指摘している箇所であるだろうと判断される部分の一部を下記に引いておく（宮内璋・松本敦訳、『アリストテレス全集17』岩波書店、1972年、所収、「七（R²41、R³45、W7）」、p. 528、に拠る）。

「…アリストテレスの第二の反論は次の如くである、すなわち、「肉体の調和に対する反対のものは肉体の不調和であり、生きている肉体の不調和は病い、弱さ、醜さである。そしてこれらの中、病いは構成諸要素間の不均衡であり、弱さは「同質部分的なもの」の間における不均衡であり、醜さは諸器官の間の不均衡である。ところで、不調和が病い、弱さ、醜さであるとするならば、調和は健康、強さ、美しさである。しかるに靈魂は、これらのもののいずれでもない、すなわち、健康でも強さでも美しさでもない。何故ならば、…」

なおこの『断片集』の訳には、本格的な「訳者解説」（論文と呼ぶべきもの）が付されている。そこでは訳者は、アリストテレスとプラトーンとの関係をめぐり、当然のことながらイエーガーのアリストテレス論を繰り返し論議の俎上にのぼらせている。

ところでイエーガーの功績の評価については、岩崎允胤が簡潔に次のように記している。

「…こうしてイエーガーは、アリストテレスの思想発展を、プラトン哲学の色彩がしだいに希薄となり実証的性格が濃厚になってゆく過程として描いた（W. Jaeger, Aristotle, 1923）。この説にたいしては、その後個別的な諸研究が積み重ねられ、プラトンの影響はやはり最後までアリストテレスに残っており、けっしてそこらかの離脱とだけはいいきれないこと、観察にもとづく実証的な生物学の研究は遍歴時代にもかなり精力的におこなわれていたことなど、多くの論点が指摘され、事態はイエーガーの主張以上に複雑であることが明らかになった。アリストテレス哲学の全体像を発展的に描出することはきわめて困難な課題であり、その解決には今日まだほど遠い。とはいえ、アリストテレス哲学理解のためのまったく新しい基本的な観点をうちだした点で、イエーガーの業績の先駆的意義は没することができない。」（岩崎著『ギリシア・ポリス社会の哲学』〔西洋古代哲学史（1）〕未来社、1994年、p.365）

なお、こうしたイエーガーのアリストテレス研究への諸評価に対しては、『パイディア』の叙述をプラトーンで完結させているイエーガーは（本継続研究（3）のⅢ、「3. 古代ギリシアの「パイディア」 とアリストテレスの位置」を参照のこと）、（生きていれば）どのような反論をすることであろうか。

- (16) 「急性病の摂生法について」の15（の前半）と57（の前半）は下記のとおりである（『ヒ

ポクラテス全集第1巻』に拠る)。(挿入したギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。)なお、57の指摘は英訳版の原文注記で追加されたものである。

「大麦粥は、その漉し汁だけを利用しようというのなら話は別だが、そうでない以上は、なるべく良質の大麦をもとにして、それをできるだけよく煮てつくったものでなければならない。なぜなら大麦粥は、他の特性 (ἀρετῆς: 長所, virtues: 効力) もさることながら、滑らかであってこそ、大麦を飲み込んでもそれが害にならずにすむわけだからである。…」(15)

「蜂蜜水は、生のものより煮たもののほうがはるかに見た目が美しい。煮ると輝き、淡く白く透明になるからである。しかし私には、煮た蜂蜜水に、生のものとは異なる特性 (ἀρετήν, virtue) が加わっているとは思えない。」(57)

- (17)ヘーラクレイトス：前540年頃～前480年頃。ギリシアのイオーニア学派の哲学者。本継続研究 (6) II. の《原文注記》の〈注記と考察〉(5)を参照のこと。

引かれているヘーラクレイトスの断片集の文章は次のとおりである (『ソクラテス以前哲学者断片集 第1分冊』岩波書店、1996年、に拠る)。

「注釈家のヒストス

このように、生命の元をなす温熱は、太陽から発して、生きとし生けるものに生命を付与するのである。この見解に同調するヘラクレイトスは、蜘蛛を魂になぞらえ、蜘蛛の巣を身体になぞらえて、卓抜な比喩を提示している。「蜘蛛は(と彼は言う)、張りめぐらした巣の真ん中に座っていて、自分の巣のどの糸かを蠅が破るや、ただちにそれを感知してそこへ急いで駆けつける——あたかも糸が破れると痛みを感じるかのようだ。ちょうどそのように、人間の魂も身体のどこかの部位が傷つけられると、そこへ急いで赴く。それはあたかも魂が身体と緊密に、一定の理(割合)に則って結び付けられていて、その身体が傷つくことに耐えられないかのようである。」(カルキディウス『プラトン「ティマイオス」注解』(34B)への注)」

- (18)「病気は自然が癒してくれる。」(『ヒポクラテス全集第1巻』; 該当箇所のローブクラシカルライブラリーにおける英訳は、The body's nature is the physician in disease. となっている。)なおドイツ語版の原文注記には(V314L.)の指示も入っている。

ところで、訳者の近藤均は、該当箇所の φύσις について、次のような注記を付している。

「『自然』に対するギリシア語はピュシス (φύσις)。『急性病の撰生法について』にあるように、この語は、「人為をくわえない生来のままの本性」というほどの意味をもつ。本節ではとくに、人体に生来そなわっている、病気を治療し健康を保つ調整機能を指す。その機能は具体的には、「涙」以降に列挙されているさまざまな現象となって現われる。ヒポクラテスが率いたコス学派は、人体が生来もつこの調整機能に絶大な信頼を寄せ、医師の役割を、個々の患者のピュシスがうまく機能するよう援助することにほぼ限定していた。このような人間観・医術観に立脚する同派が、治療法そのものの開発よりも予後を知ることのほうに力点を置いたのも当然であった。」(この小論における引用では、記述されている参照事項は略した。)

- (19) (アッポローニアの) ディオゲネース：前499年頃～前428年頃。折衷主義の自然哲学者。本継続研究 (6) のⅡ. ≪原文注記≫の<注記と考察> (2) を参照のこと。

原文注記 (Diels の指示が入っている) で指示されている断片集の5の前半を下に記す。(『ソクラテス以前哲学者断片集』第Ⅲ分冊、岩波書店、1997年、に拠る)

シンプリキオス

「そして私の考えでは、思惟 (知性) を持つのは人びとによって空気と呼ばれているところのものであって、これが万物の舵取りを行ない、万物を支配している。なぜなら私は、まさにこれこそが神であり、すべてに行きわたって、万物を配置し、あらゆるものに内在していると思うのである。そしてこれを分け持たないものは何ひとつない。だがそれを他のものと同じ仕方でも分け持つようなものも何ひとつなく、思惟 (知性) にも、また空気そのものにも多くの様態変化がある。なぜならそれは多様に姿を変えるのであって、熱くもなれば冷たくもなり、乾きもすれば湿りもし、静かにもなればいっそう迅速に動きもする。そして他にも多くの偏異差が内在し、風味も色も数限りない。…」

- (20) 「栄養について」(ローブクラシカルライブラリーでの英訳は NUTRIMENT) の該当箇所 (ドイツ語版では (IX112L.) の指示も入っている) のギリシア語と英訳は下記のとおりである。なお、『ヒポクラテス全集第2巻』の近藤均訳では、「どんなものでもその本性は、教わって得られたものではない。」となっている。

Φύσεις πάντων ἀδίδακτοι.

(ἀδίδακτος : 訓練されていない、教えられない、ひとりでに覚えた)

The natures of all are untaught.

(すべてのものの本性は教えられてはいない。)

近藤も、この訳文の注記で「関連記事として『流行病』第6巻第5章第1節参照。なお、『食餌法について』第1巻第15節にも類似の表現がみられる。」と指摘している。

- (21) ここでイエーガーが引いて説明しているものは、ディオゲネース・ラーエルティオスが、『ギリシア哲学者列伝』(第3巻第1章「プラトン」)の中で、アルキモス (シケリアの人で前四世紀半ば頃に活躍した弁論家で歴史家; 加来彰俊) が伝えるエピカルモスのことばとして、記している部分である。それは、内山勝利他訳、H. ディールス・W. クランツ編纂 *Die Fragmente der Vorsokratiker* を底本とする、『ソクラテス以前哲学者断片集 第Ⅱ分冊』(岩波書店、1997年) では下記のように訳されている(16)。なお前段(15)のアルキモスの説明も重要な関連をもつ内容なので、合わせて引いておく。なお内山らの和訳で底本とされているものは1951-52 (Berlin) のものであるが、その底本の第1版は1903年にディールスに拠って出されている。その後の改訂経過の詳細は、『ソクラテス以前哲学者断片集 別冊』岩波書店、1998年、を参照のこと。

(15) 「プラトンは、イデアについての見解の中で [「パイドン」]、もし記憶というものがあるのならば、記憶はなにか静止したもの、留まっているものに関するものであるから、イデアはあるものに属していることになるし、また、イデアより他に留まっているものはなにもない、と述べている。彼が言うには——「なぜなら、生きものは、もしイデアに触れることがなければ、そしてそのために生まれ

つき知性をそなえているのでなければ、どうやって生きながらえてきたのか。実際には、生きものは<生まれの>類似性や栄養について、彼らにとってそれらがどのようなものであるかを記憶しているし、それによって、類似性の認識がすべての生きものに生得的なものであることを明らかにしているのである。それゆえにこそ、これらのものは同じ種族のものを感じとるわけである」。ところで、エピカルモスはどのように言っているのだろうか。

(16) 「エウマイオスよ、知恵はひとつのものだけにあるのではない。

むしろ、いやしくも生きているものは、すべてまた知識をもっている。

なぜなら、雌鶏の類もまた、

もし熱心に観察してみる気があるなら、子を生きたまま産むのではなく、卵を抱いて、それを生命のあるものにすることが分かるからである。

けれども、自然だけが、この知識がどのようなものであるのかを

知っている。なぜなら、自然はそれ自身によって教えられるからである。」

(『ギリシア哲学者列伝』Ⅲ14-16)

*上記(15)の<生まれの>には、「Diels による補訂」という注記が、また「類似性」には「『パルメニデス』128Ef.と比較せよ。」という注記がある。

なおディオゲネース・ラーエルティオスは、後3世紀初頭に活躍したギリシアの伝記作家・哲学史家で、「今日も現存する『ギリシア哲学者列伝』10巻をギリシア語で執筆したこと以外に、その生涯や事跡についてはほとんど何も知られていない。」ということである(松原著)。加来彰俊は、和訳『ギリシア哲学者列伝』(岩波文庫、上・中・下、1984年、1989年、1994年)の「解説」文で、「ある学者の計算によれば」ということで、本書のなかには、「250人の著者への1,186回を下らない言及があり、典拠としてあげられている書物の数は365にも上る」と言われている、と説明している。

またエピカルモスは、前560/530～前460/440年頃、のギリシア最古の喜劇詩人で、「ピュータゴラス派の哲学者兼医師としても知られ」という。(松原著)

- (22) アISKYLOS 『テーバイ攻めの七将』の該当箇所は、次のとおりである(高津春繁訳、岩波文庫、1973年)。

「この地こそお身たちがそのいつくしみの床を幼い頃に這い廻ったところ、養育(τροφή, upbringing)のありとある労を身にうけ、この急に備えて忠節の楯をかざす民となるべく育て上げてくれたのだ(παιδείας, nurtured)。(挿入のギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。)

イエーガーによれば、「*paideia* という語の歴史」の検討から、エピカルモスのものとされる断片が偽作だと判定される、という(エピカルモス：前560/530年頃～前460/440年頃、『テーバイ攻めの七将』：前467年)。

- (23) ヒポクラテース「法(医の本分)」の該当箇所は、本継続研究(5)のⅡ. 4. の<注記と考察>(7)で引いてある。重複ということになるが、イエーガーの論述を理解するために、ここで改めて引いておくと下記のとおりである(『ヒポクラテス全集 第1巻』、挿入のギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る)。

「医術を習得する(the learning, μάθησις)ということも、実際のところ、大地に生えるものを見守るということに通ずる。つまり、我々の生まれつきの資質は

いわば土壌である。そして医術を教える者の教説は土壌にまかれる種、ということになる。さらに、幼少から教育を受けるというのは、ちょうどよい時期に種が耕地にまかれることに相当し、教育を受ける (instruction, μάθησις) 場所は、いわばまわりをとりまく空気からやってきて種から生ずるものを養う養分に相当する。勤勉は毎日の耕作にあたり、そして年月は種から最後まできちんと育つようにこれらすべてを強化育成するものである。」

なおこの引用文は、イエーガーの叙述の文脈では、「外部から課せられる訓練 (training) やしつけ (discipline) にすぎない」ものとして、ネガティブに評価されている。参考までに、「法 (医の本分)」の訳者である大槻マミ太郎は、その概説で、ギリシア医術がソフィストたちの攻撃に対応していく必要があったことを述べながら、「この作品がヒポクラテス医学派のものであるとするなら、ソフィスト時代の比較的あとに属するものと思われる。」と指摘している (『ヒポクラテス全集 第1巻』)。

- (24) 『ティマイオス』の該当箇所は次のようである (『プラトン全集 12』岩波書店、1975年)。(挿入のギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。)

「ところで、死すべき定め生きもの (人間) の部分となり肢体となるものすべてが、結び合わさって一体化されてしまうと、その生きものにとっては、生命を、火と空気の中で保って行くのが「必然」の結果となったのですが、またそのために、それはこの火や空気によって、溶かされたり、空にされたりして、衰弱して行きましたから、そこで神々は、このもののために、救助の策を講じました。すなわち神々は、人間の性と同族の性のものを、[人間の場合同様異なる] 他の形態および他の感覚機能に混ぜ合わせ、別の生きものになるようにして、これを植えつけたのです。この生きものが、実は、現在、農耕によって養成されて (have been trained, παιδέυθεντα)、われわれに馴れるようにさせられているところの、栽培された木だとか、いろいろの植物だとか種子だとかにほかならないのです。」

- (25) *Visits* 「流行病」 (= 「異国の諸都市への訪問」) の該当箇所をその手前から引くと、『ヒポクラテス全集 第1巻』では次のような訳になっている。

「労働は四肢や肉質を養う糧であり、睡眠は内臓を養う糧である。

魂を働かせることとは、人間の場合、思慮深くすることにほかならない。」

なお上記該当箇所は、ローブクラシカルライブラリーでは下記のとおりである。

πόνος τοῖσιν ἄρθροισι καὶ σαρκὶ σίτος (食物・糧食), ὕπνος σπλάγχνουσιν. (Labor is food for the joints and the flesh, sleep for the intestines.)

Ψυχῆς περίπατος φροντὶς ἀνθρώποισιν. (Intellection (思考) is a stroll (散歩) for the soul in men.)

- (26) 「食餌法について」2.61では、運動 (exercises, πόνων) の効力のことが論じられ、その中で「実際、運動には自然なものと過激なものがある。自然な運動とは、見たり聴いたり発生したり考えたり (thought, μερίμνης) する運動である。」「人間の思考 (the thoughts, μερίμνᾱ) に関していうと、魂 (the soul, Ψυχῆ) は、その作用で動いて熱くなって乾く。…」と述べられている。

なおローブクラシカルライブラリーでは、exercise (運動・鍛錬) と訳される πόνος (訓練、鍛錬、骨折り仕事) についての注記があり、古代ギリシアでは πόνος は natural (自然なもの) と violent (過激なもの) とに分けて理解され、その violent とは artificial (不自然な、人為的な)、つまり意識的な、強制的なもの、筋肉の鍛錬などを意味している、と説明されている。

参考までに、続く2.62は「散歩 (walking, περίπατοι) は自然な運動」ではあるが「過激な点もないわけではない」とし、その効力が論じられ、以下、「走行」「腕振り運動」「砂場での鍛錬とオリーブ油を塗って行なう鍛錬」「体に生じる疲労」が論じられている。(『ヒポクラテス全集 第2巻』)

なお、勝田守一は論考「人間形成と数学教育」(1958年)のなかで、プラトーンにおいては数学が実用だけではなく人間形成という観点からとらえられているということ述べてつづ、「これは、のちに、その影響を受けたイソクラテスによってもっとはっきりと「わたしは、この学習(数学の学習)を精神の体操であり、哲学の準備と考える」ということばでいいあらわされる。」と指摘している。(考察ノート②～継続研究(7)における～【資料-5】)

この勝田の指摘内容は、イエーガーの叙述によって再認識させられるものがあるが、イエーガーの該当箇所を読むときに改めて目を向けることにする。

(27)「食餌法について」2.37では、「各地域の状況と特質は、以下のように認識しなければならない。」という書き出しから始まり、縷々説明されていく。

またその2.39では、「それぞれの飲食物がもつ効力は、本来の効力であれ人為的に付与された効力であれ、つぎのように認識しなければならない。甘いもの、油っこいもの、塩辛いもの、その他何かそのようなものの効力について概括的に語ろうとする人たちは、正しいことがわかってはいない。なぜなら、甘いものといってもそれらは互いに同じ効力をもっているわけではなく、油っこいもの等々でも事情は同じだからである。」という書き出しから始まり、「つまり、あらゆるものについて一概にどうということを明らかにすることはできないのである。そこで、個別的にどんな効力があるのかを示すとしてしよう。」と結ばれている。(引用は『ヒポクラテス全集 第2巻』より)

(28)イエーガーは、この「食餌法について」の執筆年代をアリストテレスの論理学の展開と関連させて理解しようとしている。

(29)「古来の医術について」第20節の冒頭は次のようである(小川訳、岩波文庫)。

「次のように説く医者たちとソピステースたちがある、すなわち人間とはなにかを知らない人には医術を知ることにはできない、人間を正しく治療しようとする人はこのことを知悉しなければならないと。ところでこの人たちの論は哲学に関係しており、たとえばエンペドクレスその他の人々が自然について、そもそも人間とはなにであるか、最初どのようにして生じたか、なにからできているのかを書いたごときである。しかしながらわたしとしては、まずソピステースや医者誰かによって自然について語ったり書いたりされて来たことがらは、絵画術と関係があるよりももっと少ししか医術とは関係がないと考えるものである。…」

「食餌法について」第一巻第2節の冒頭は次のようである(『ヒポクラテス全集 第

2巻]。)

「私が力説したいのは、人間の食餌法について正しいことを書き記そうとする者は、まず人間一般の自然性を知り、そのうえでなおよく知らなければならない、ということである。つまり、そもそも人間がどんなものから構成されているかを知り、さらに、どういうものによって支配されているかをよく知らなければならないのである。実際、そもそもの構成を知らなければ、そこから生じる結果を知ることにはできないであろう。また、体を支配している要素がわからなければ、人間にとって有益なものを与えることはおぼつかないであろう。書き記す者はこれらのことを知っていなければならない、そのうえで、私たちが生活の糧とするいっさいの飲食物について、それぞれ本来どんな効力があり、また人為的に加工されるとどんな効力を生じるのかを知っていなければならない。…」

なおこの「食餌法について」の訳者(近藤)は、上記二つ目の文章に、次のような注記を付している。

「ここには、人間の本性を知らないで医学を究めることは不可能であるから、人間を正しく治療しようと思うならまず人間そのものを研究することが先決問題である、という主張をよみとることができる。こういう主張は『古来の医術について』第20節や『人間の自然性について』第1節ではいわば空理空論として批判されている。」

(なお訳者は、「食餌法について」2.39(上記(27)の引用文)の文章中に、「『古来の医術について』第14節でも同工異曲なことが述べられている。」という注記を付している。)

イエーガーは、「食餌法について」1.2は「古来の医術について」20への回答のように思われる、と述べている。

(30)「食餌法について」1.2の該当箇所を限定して引いておくと下記のとおりである(『ヒポクラテス全集 第2巻』)。なお、この部分を含む前後の叙述は、(32)を参照のこと。

「…しかし、以上に述べたことを知っても、それだけではまた、人の世話を十分にすることができるとはいえない。なぜなら、人間は食べてばかりでは健康を保つことはできず、運動もしなければならぬからである。食物と運動には相反する効力があり、それらが互いに補い合って健康に役立っているのである。」「…これらのことに加え、各人の体質にみあう食物と運動の適量を、つり合う数量が過不足のない状態で把握できたならば、その人たちの健康が厳密にわかったことになる。」

(31)プラトーン『国家』406a-bの、直接的な該当箇所は下記のとおりである(グラウコーンに対するソークラテースの発言)。

「[いや、そうではないのだよ、君が次のことに思いをいたすならばね]とぼくは言った、「むかしは、病気に付き添ってお守りをする流儀の今日のような医術は、人々の言うところでは、アスクレピオスの流れをくむ人々の用いるところではなかったのだ。ヘロディコスが現われるまではね。このヘロディコスは体育の先生だったが、病弱になったので、体育と医術を混ぜ合わせたやり方を編み出して、まず第一に誰よりも最も当人自身を、さらに彼以後の多くの他の人々を、疲

れ果てさせることになったのだ。』(藤沢令夫訳、岩波文庫、上)

アリストテレス『弁論術』1.5.1361b5の該当箇所は下記のとおりである。

「しかし身体の徳は健康である、がそれは身体を使用しながら無病であるような健康であるのではなくてはならない。というのは多くの人々はヘロディコスが健康であると言われるような仕方健康であるが、これらの人々を誰一人健康のゆえに幸福だと称えはしないだろう、それは彼らが人間的な楽しみ事のすべてから、あるいはその大部分から遠ざからなければならぬためである。」(『アリストテレス全集 16』岩波書店、1968年)

ヒポクラテース「流行病」6.3.18. は、下記のとおりである(『ヒポクラテース全集 第1巻』)。

「ヘロディコスは、熱病患者たちに対して、走らせたり、長時間レスリングをさせたり、蒸気浴をほどこしたりして死なせてしまった。ひどい話である。熱のあるときは、レスリングや散歩や走行やマッサージは禁物である。そんなことをすると苦痛に苦痛がかさなり、血管はふくらんで赤くなって溢血するし、顔色は黄色くなるし、側胸部は、炎症はおこさないけれども痛むことになる。」

なおヘロディコスに関しては、『アリストテレス全集 16』に、「ヘロディコスは紀元前420年ごろの人。トラケのセリュムビアの生まれ、著名な医者で、健康体操の教師。医聖ヒポクラテースの教師の1人であった。彼の療法については、プラトンの『国家』第三巻406A以下参照。」という注記がある。また『国家』(岩波文庫)には、「メガラに生まれ、トラキア地方のセリュンプリアの市民となった。種々の養生法や鍛錬法を考え出して自分もそれを守った。『パイドロス』227D, 『プロタゴラス』316E参照。」という注記がある。「流行病」6.3.18.におけるヘロディコスに関する注記に関しては、3. <注記と考察> (4)を参照のこと。

イエーガーによって指摘されている、ヘロディコスについてのアリストテレスの見解(プラトーンと同趣旨)とは、健康自体を第一目標にするような健康観(=‘健康のための健康’といったような考え方)のことだろう。

(32)「食餌法について」1.2では、上記の注(29)での引用個所に続き、(《原文注記》83.と84.の双方に対応させるために長くなるが)次のように論述されている(『ヒポクラテース全集 第2巻』)。

「もともと強性のものについては、しかるべき折にはどのようにしてその効力を弱めたらよいか、また弱性のものについては、人為的にどのようにして強めたらよいかを認識する必要がある。しかし、以上に述べたことを知っても、それだけではまだ、人の世話を十分にすることができるとはいえない。なぜなら、人間は食べてばかりでは健康を保つことはできず、運動もしなければならぬからである。食物と運動には相反する効力があり、それらが互いに補い合って健康に役立っているのである。実際、運動とはそもそも、体内に現にあるものを消費することであり、飲食物とは、空になったところを充たすものである。当然ながら、運動については、自然な運動であれ過激な運動であれその効力をよく知って、どんな運動が肉質を太らせ、どんな運動が肉質を痩せさせる傾向があるかを把握する必要がある。そればかりでなく、運動の、食物量や人間の体質や体の年齢との

つり合いや、一年の各季節とのつり合いや、風の変化とのつり合いや、生活をいとなむ地域の状況とのつり合いや、一年の気候とのつり合いもよく知らなければならぬ。また、星の上昇と下降も知らなければならぬ。人間に疾病をもたらす食物や飲み物や風や全宇宙の、変化や過剰に気をつけることができるようにするためである。しかしこれらすべてをよく知ってもまだ十分にわかったとはいえない。これらのことに加え、各人の体質にみあう食物と運動の適量を、つり合う数量が過不足のない状態で把握できたならば、その人たちの健康が厳密にわかったことになるだろう。しかし現実には、前述したことはすべてどうなっているかわかっているが、いま述べた点はわかっていないのである。もし、ある人が裸になって体育場で鍛錬するときに、誰かがそばにいてその人を見るならば、その見ている人は、相手が健康を維持するには、どのように気をつけて食物や運動をふやしたりへらしたりしなければならぬかがわかるであろう。しかしそばにいないければ、食物と運動の量を厳密に定めることはできないのである。つまり私は、どの程度のことしか見出せないかを述べてきたのである。実際、もしほんの少しでもどちらかがもう一方よりも不足するならば、長い時間がたつうちには必ず過剰なほう体が支配し、ついには病気になる。私以外の人たちもここまでは探求を試みてきたが、そのことがまだわかっていない。しかし私にはそれがわかったのであり、また、どちらかが超過することによって患うことになる前に、あらかじめ診断をくだすこともできるようになったのである。実際、病気は突如として人間をおそうものではなく、少しずつ進行したうえでどっと現われる。私は、体内で健康なものが病性のもに支配される前にはどういう症状を呈するかがわかったし、どのようにしてそういう状態を健康状態へ戻すべきかもわかった。すでに書かれていることにこのことを付け加えれば、私の意図する仕事は完了する。」

(33) 該当箇所は上記 (32) で引いておいた。イエーガーの指摘から、prophylaxis (あらかじめの守り) は「予防」という意味に解される。

Received : April, 26, 2017

Accepted : June, 7, 2017